アフター・ザ・ワールド・エンド

涼風　輝

最後の瓦礫を押しのけて、外へ出た。スカートがすっかり煤まみれだ。体のあちこちが痛い。正直、何が起こったのかよく分かってなかった。なんかの拍子に上手いことどっかの窪みに嵌まって、それで難を逃れたらしい――と想像してるけれども。

目の前には平坦な眺めが広がっている。どっかで見た光景だな、とあたしは思った。歴史の教科書に出てくる、大空襲後の東京とか、原爆投下後の広島とか、そんな感じだ。高層ビルがすっかり取っ払われたおかげで、ずいぶん空が広く感じる。その空はやけくそ気味に真っ青で、真夏の太陽はもう、地面でバーベキューが焼けそうなくらいに晴れまくり。

こんな風に『おしまい』が来るなんて思ってなかった。

鏡もブラシもハンカチも携帯も、鞄ごと瓦礫の山に飲み込まれてサルベージ不能。冷たい水が一口飲みたかったけど、この状況じゃ冷たい水どころか、ぬるま湯だって調達できるか分かったもんじゃない。

ずいぶん冷静に事態を把握できてるじゃない、と自分でも思う。見渡す限り、人間の姿はない。もしかすると、この世界で生き残ってる人間は、あたし一人かもしれない。何もなくて、誰もいない。それにしちゃ、あたしはずいぶん落ち着いてる。

だけどいったいぜんたいどうして、あたしなんかが生き残っちゃったんだろう。神様がこの空のどっかにいるんだったら、ひどい勘違いをしてる。この世界にはあたしなんかよりもっと、生き残るべき人間がいたはずなんだ。だけど現実には生き残ったのは見る限りあたし一人で、周りには少々の死体と瓦礫の山。きっとこういうのを「神も仏もない」っていうんだ。

どうしてこんなことになっちゃったんだろう。思い返してみる――

クラスの男子の間で『おしまい』の話題が口に上るようになったのは、せいぜいここ数ヶ月のことだ。最初は、ムー大陸やアトランティスと大差ないくらいの、有名な絵空事の域を出なかった。だけどそのうち『おしまい』の到来は、富士山がいずれ噴火する、というのと同じ程度には、信憑性を帯びたものになった。それが明日なのか一千年後なのかは分からない、だけど、いつか必ず起こる――。

そんな話を聞いたって、正直ピンとこなかった。『おしまい』は明日来るかもしれない、十日後に来るかもしれない、百年後に来るかもしれない。そんなことはあたしという個人に当てはめたときには、明日死ぬかもしれない、八十年後に死ぬかもしれない、っていう当たり前のことに過ぎない。

「でも実際、オレらだっていつ死ぬか分かんねーわけじゃん？　だったら、将来のこととか考えるよか、今楽しーこと考えた方が良くねー？」

そんなことを口走ったのはタクトのバカだ。放課後の教室で何の前触れもなく唐突に「オレと付き合わねー？」とか安易なくどき文句であたしに迫ったホンモノのバカ。バカ選手権日本代表。日本代表は言いすぎか。バカのクラス代表。

なんでタクトがあたしにちょっかい出してくるのかよく分からない。面白がってるだけだろう、とは思う。だけどタクトのせいで、他の男子、ユウヤとかトシハルとかシンイチとかまであたしの周りに集まってくるのは、ちょっと、いやかなりウザい。

「あ、いえるいえる。『今を生きる』ってヤツだよねー」

「つーかタクトの場合、そんな立派なモンじゃなくてさ、単に快楽最優先なだけじゃん？　快楽至上主義、つーかさ」

「いやムシロ下半身至上主義」

「あーっはっはっは、やべーやべー、当たってんじゃーん」

男子どもがあたしの机をぐるっと囲んで、大声でそんなバカ話を、ぎゃーぎゃーと騒ぎ立てている。別段あたしを中心に置く理由はない。これって何かの罰ゲーム？　とか思う。その上、タクトが休み時間ごとにあたしの机に来るせいで、あたしは一部のタクトファンから睨まれっぱなし。……なんでこのタクトが一部女子に人気があるのかも、分かんないけど。

「だけどさー、実際『おしまい』来ちゃったらどうすんよ？　やり残したことか多くねー？」

「まさにヤリ残し？」

「つーかヤリ足りねえ」

「オメーそれ『おしまい』とか関係なしにいっつもそうだろ」

ユウヤとシンイチが、オヤジみたいにげひゃげひゃ笑っている。こいつらの脳細胞は半分くらいが、ペニスと直通で血流のやり取りをしているのだ。

「でもさー、もしほんとに『おしまい』来るんだったら、今来た方が良くなーい？」
窓際の方から声が上がった。何人かの女子が離れた場所から、このタクトたちの会話に混ざろうとしたのだ。わざとらしい。男子とは無関係に自分たちで喋ってるふりをしながら、横目でちらちらとタクトたちの様子を確かめている。
「だってさー、たぶん今が人生で一番楽しいじゃん？　今が一番カワイイしさ、なんかこっから先、オバサンになるだけだったら、いっそ今『おしまい』来ちゃった方が良くない？」
「えー、夢なーい。それってないよー」
「じゃあさ、みっちんの夢ってどんなん？」
「んっとね、チャーミーグリーンなお婆ちゃん」
「ありえねー！　ぜってーありえねーよ」
くだらない。ほんの少しだけ彼女たちの話に耳を傾けていたあたしは、再び読みかけの本に視線を戻した。今が一番カワイイ？　その程度で？　そいつはご愁傷様。それじゃ確かにこの先の人生悲惨だから『おしまい』でも来ちゃった方がいいね、きっと。
あたしがその時開いていた文庫本は、カミュの『異邦人』。別に面白いと思って読んでるわけじゃない。周囲との間に壁を作るアイテムとしてこの本を選んだだけのことだ。実に古めかしい名訳の中で、冒頭近くで青年が飲むミルク・コーヒーがやたら気になる。ミルク・コーヒーだって。いい大人が母親の死を悼みつつコーヒー牛乳？　それがカフェ・オ・レだってことに気がつくまでには、ちょっと時間がかかった。
「つーかどーせ一生ヤリ足りねーんだよな、オレ。ヤリ終わってなんかこれで満足、ってことぜってーねーしさ。だからさ、いっそヤリながら死ねたらもうサイコー」
太陽のせいにしてこのバカ撃ち殺したらスカッとするかしらん。
「えーでも、それって難しくねー？　タイミング難しいって。発射した瞬間に死ねればいいけどさ、今イキそーってその直前の瞬間に死んだら、どうする？」
「そん時はいろんな意味で逝っちゃったってことで」
「いや逝っちゃったじゃねーだろ」
あたしは今自分の手の中にあるのが文庫本じゃなくて、サブマシンガンとかだったらどうだろう、と想像してみた。空はいい天気だし、ちょっとお日さまのせいにしてこいつら撃ってみるのもアリじゃん、とか思うかもしれない。
ぱらぱらぱらぱらっ！
軽快な音がして、薬莢がポップコーンみたいに跳ね上がる。タクトはにへらにへらと薄笑いを浮かべたまんま、脳天ばっくりザクロみたいに割れて、後ろ向きに倒れる。あたしは机の上に仁王さまみたいに立って、このクラスの連中の頭を片っ端から撃ちまくる。そこらへんからプシューって噴水みたいに血しぶきが上がって、辺り一面水芸の始まり始まり。そんなことを空想しながらあたしは、あれ？　でもこれって空想？　なんか、頭ボーっとして……
あたしを現実世界に引き戻したのは突然の尿意だった。っていうのも何かひどい話だ。とりあえず、トイレなんて構造物が無事に残っているとは考えにくいから、せめて物陰に隠れようと思う。巨大なコンクリートの破片が、ちょっとした日陰を作っている。あたしはその陰にしゃがみこんでスカートをまくり上げ、パンツをずり下ろした。誰かに見られる心配なんてまずないだろうけど、さすがにトイレくらい物陰に隠れてしないと、何か人間として大事なものを失ってしまうような気がしたのだ。コンクリ片の陰でお尻丸出しでしゃがみながらあたしは、それでもやっぱり、ちょっと切なくなった。
なんか変なことを考えていたみたいだ。あんまり暑いから、頭がちゃんと回ってないのだろう。あたしはサブマシンガンを持っていない。クラスメイトの脳天をぶち抜いてもいない。あたしがやったわけじゃない。ただ、『おしまい』が本当に訪れただけのことだ。
確認したわけじゃないけど、タクトもユウヤもトシハルもその他もろもろも、みんな死んじゃったんだろうな、と思う。あたしがどっかからサブマシンガンを手に入れて自ら手を下す機会は、きっと永遠に来なくなったのだ。
用が済んで、パンツを引き上げ、あたしはまた少し歩き出す。とにかく、飲み水とか食べ物とかを探す必要がありそうだ。瓦礫の隙間に流れ込む水滴を視界の隅に留めながらあたしは、どうあっても自分の尿を飲んで命を繋ぐような事態は避けたい、とか深刻に思ったのだ。
顎から首筋にかけて、汗の粒がつっ、と滑った。暑い。暑くて死にそう。どこか日陰で休んで、もう少し涼しくなってから歩いた方がいいんだろうか。でも、こんな大変動の後だから、昼の次に夜がちゃんと来るかどうかだって怪しいものだし、夜は凍りつくように寒くて真っ暗で歩けない、なんてことだってありうる。あたしはとにかく体力のあるうちに歩くことにした。どっかに、半壊ですんだコンビニとか、ないだろうか。
横倒しになった自販機が、ほぼ完全な姿で残っているのを見つけた。この鉄の

箱の中には、ウーロン茶やコーヒーが入っている。喉がごくり、と鳴った。だけど自販機は完全な姿すぎて、どこからもこじ開けようがない。コインを入れたらジュースが出てくるだろうか？　でも、電源コードがブチ切れてる自販機がちゃんと動くとは思えなかったし、そもそも『おしまい』の大混乱で、財布なんかどっかになくしてきてしまった。あたしは自販機の角を靴の裏で蹴っ飛ばした。無駄な努力だった。

「あー……アイス食いてー……」

わざわざ声に出してみたら、ますます悲しくなった。生き物はおろか、動く物の姿さえ見えない世界で、太陽だけが過激に自己主張している。じりじりと、皮膚や髪の毛が焦げるような気がする。水も欲しいけど、どっかで日焼け止めとか手に入らないかな。このままじゃ、せっかく肌の白さが自慢だったのに、日焼けで真っ赤になっちゃう。

とか考えながら、我ながら馬鹿なことを考えてるな、と自嘲する。とにかくこんな馬鹿げたことばかり思いつくのは、暑すぎるせいだ。汗が滝みたいにだらだら流れて、ブラの紐のあたりに溜まって、気持ち悪い。

アイス食いたい。それも、上等なアイスクリームじゃなくて、駄菓子みたいなアイスキャンディー。一本五十円くらいの。前歯がちりちり痛くなるような、かちんこちんに凍ったアイスを、ばりばり噛み砕くんだ。――想像すればするほど、嫌になる。アイスじゃなくていい、水が一口飲みたい。

結局、一口の水も食べ物も発見しないうちに、夜になった。無事に夜が訪れたことで、少しほっとした。幸いにして、凍りつくような寒さに襲われることもなく、普段の夏の夜と変わらないくらいの、そこそこ過ごしやすい夜だった。

今日見かけた有機物といえば、半分焼け焦げた誰かの死体だけ。さすがにそんなものを口にするわけにはいかない。だけど、これだって食べれば栄養にはなるよね、とかそんな恐ろしいことを思いつくくらいには、状況は切羽詰まっているのだ。

腹減った。

考えてみれば『おしまい』以来、何も口に運んでいない。膝が笑い出すのも当然だ。これだけ綺麗に何もかもなくなってしまうなんて、思わなかった。たくさんの人が死んだはずなのに、死体すら見かけたのは数人だけだ。燃え尽きたんだか蒸発したんだか、ともかく消滅してしまった。こんなひどい状況で、どうしてあたしだけ五体満足で生き残ったんだろう。ひどい話だ。

ひとまず、体力を使いすぎないことだ。今夜は月も細くて、明るさも足りない。今日はどこかで静かに寝て、明日、明け方の時間を狙って、食べ物を探しに行こう。

見渡す限り瓦礫の山だから、どこで寝ても一緒だ。せめて少しでも寝心地のいい場所にしようと、あたしは細かい石ころを払って平らな地面の見えるところを見つけ、座り込んだ。この場所は、かつては公園か何かだったのかもしれない。石や瓦礫が比較的少ないし、街路樹やブランコの破片らしきものもある。地べたに体を横たえ、寝ようとした、その時だ。

「……携帯？」

地面と同じ高さになったあたしの目線の先に、携帯電話があった。カメラ機能もついてない、というか今どき折りたたみ式でさえない、旧式のやつだ。こんなものが、これだけ完璧な形で残っているなんて。どうせならもうちょっと生き延びるための役に立つものが落ちていればいいのに。あたしは携帯に手を伸ばした。電源は入っている。アンテナは一本も立っていない。

何かの暇つぶしにはなるだろうか。あたしはボタンを色々押して、携帯の機能をフルに調べる。着メロ……ろくなのが入ってない。画像……カメラがない携帯に入ってる画像なんて、たかが知れてる。住所録……

住所録。

メモリー。これは案外面白いかもしれない。他人の秘密を盗み見る感じ。……持ち主はきっともうこの世にいないんだろうけど。几帳面にカテゴリ分けされている。《仕事関係》《大学》《友人その他》……最初が仕事関係、っていうのもどうかな、って思う。登録件数が一番多いのも《仕事関係》で、それでも二十件くらい。全部で五十件もいかない。あたしの携帯だってもうちょっとたくさんの番号とかメアドとか登録してあったし、友達は百件余裕で超えてる人が大半だったから、そう考えるとこの携帯の持ち主は、交友関係の狭い人だったらしい。

だけど、ちょっと待った。ひょっとしてこれって、仕事用の携帯なんじゃない？　業種によっては会社から携帯支給されたりなんかしてて、そうすると、仕事用とプライベートで携帯使い分けてる可能性もある。それだったら、友達関係の登録件数が少ないのも、納得できる。きっとそうだ。

じゃあ、この携帯の持ち主はビジネスマン。外回りの営業さんとかかな。家族の番号とかがないのを見ると、きっとまだ独身。若いのかな。二十代後半から三十前後くらい。恋人は……いるのかな？　住所録のグループ分けから一件だけ外れて登録されている、名前『みゆ』。さて、これが彼女なのかどうか。娘とかじゃないよね、まさか。

メールの送受信記録とか見るのは、明日以降にしようと思う。楽しみ……というか、暇つぶしはなるべく残しておいたほうがいい。この先、誰とも会えず、何の楽しみもない日が、いったい何日続くか分からないから。今日はもう、疲れて眠くなった。だから、眠れるときに寝よう。

あたしは手足を猫みたいに丸めて、地面に横になった。そんなに急激に気温が下がったわけでもないのに、地面はとても冷たく、固く感じた。あたしは一瞬だけ、ふわふわのベッドの感触を想像し、すぐに空しくなってその空想を頭から追い出した。すっかり疲れきっているはずなのに、目を閉じても、なかなか寝付けなかった。

翌朝は早い時間に目が覚めた。日が昇ると、バーナーに点火されたみたいに急に暑くなって、それで寝ていられなくなったからだ。腕時計は失くしちゃったけど、昨夜拾った携帯電話は、ちゃんと「05:56」と時刻を示していた。まだ六時前かよ、と軽く液晶画面にツッコミ。

全然寝た気がしないけど、ともかく、これ以上寝てられない以上、引き続き食べ物とかを探して歩き回るしかない。一眠りして胃が活発になったのか、ぎゅうううっ、と縮むような感じで音が鳴った。いい加減本気でヤバい。なんか食べないと、倒れそう。

お腹が減りすぎて、食べ物のことばっかり考えてしまう。先週ユミとエリコと一緒に行った、イタリアンのお店。駅からちょっと離れた住宅街の中にできた、新しいお店。雰囲気も味もよかったけど、立地がなんか微妙だったから、あんまり流行らないかもしれない。だから、即刻つぶれちゃったりしないように、あたしたちで定期的に通おう、とか言ってたんだっけ。何て言ったっけ、あの時食べた、魚介のトマトソースのパスタ。タリアテッレじゃなくて、プリマベーラでもなくって……ああ、そうだ、ペスカトーレだ。美味しかったなぁ、ペスカトーレ。

太陽はどんどん高いところへ上っていく。こめかみから頬っぺたまで、粘っこい汗の粒がつつつっと滑って、顎に沿って落ちる。ペスカトーレ、ペスカトーレ。いや、ペスカトーレじゃなくていい。何でもいい、食べ物、あと水。

探してみれば、案外いろいろ落ちているものだ。その日の午後になってあたしは、表面が焼け焦げて黒ずんだ冷蔵庫を発見した。もちろん、電気が供給されているはずはないから、中身はすっかりぬるくなっているんだけど、それでも、比較的無事な状態だった。冷凍室のアイスクリームはすっかり溶け出してわけが分からなくなっていたし、豚肉やキャベツは異臭を放っていたけど、どうやらコーラのペットボトルは、品質が劣化している様子もなく、飲めそうに思えた。

あたしは冷蔵庫からコーラを取り出した。一・五リットルの大きなペットボトル。プラスチックのキャップをひねるとしゅん、という小気味いい音がして、それだけであたしは涎が出そうだった。丸一日以上、一滴の水すら口にしていないのだ。あたしはペットボトルに口をつけ、ほとんど垂直になるまで傾けて、喉の奥へと生ぬるいコーラを流し込む。

冷えていないコーラはまったく美味しくなかったけど、それでもあたしは、涙が出そうになった。コーラの糖分やカフェインやカラメル色素が、骨の奥や皮膚の中まで浸透していくような気がした。ああ、とにかく、これで少し生き延びた。糖分はエネルギー、車で言うところのガソリンみたいなものだ。って、どこで聞いた話だっけ。家庭科の授業かな。とにかくこれで、しばらく体が動くだろう。

あんまり勢いよく流し込んだものだから、口の端から少しコーラがこぼれてしまった。もったいない。あたしは手の甲で口を拭って、ついでにその手の甲をぺろっと舐めた。皮膚の表面は、しょっぱい味がした。

汗ばっかりかいてるような気がしてたけど、実際はそうでもなかったらしい。コーラで水分を取った途端、全身の汗腺がいっせいに開いたみたいに、汗がだばだばとあふれ出した。水分、足りてなかったんだな。あたしはその場に座り込み、少し落ち着いて、ゆっくりとコーラを飲み込んでいった。コーラの水分は胃壁に触れるとすうっと吸い込まれて、全身に染み込んでいくような、そんな気がする。

一・五リットルのペットボトルは、すぐに半分以上が空になった。もう少し飲みたかったけど、これ以上は飲まずに残しておいて、また夕方にでも飲んだ方がいい。このコーラが尽きる前に、別の食べ物を探そう。

さて、まだ何か落ちているだろうか。さっきの冷蔵庫の中の、豚肉やキャベツの腐り具合からすると、この気温の中、ナマモノが無事である可能性は皆無だ。保存のきく加工食品の類に期待するしかない。缶詰とか、レトルトパックとか。……ああ、でも、缶詰が落ちていたとしても、開けるのが難しいかもしれない。都合よく缶切りが落ちてるわけないし。

もう、考えれば考えるほど、食べ物のことばっかり思い浮かぶ。

――お母さんは熱心な朝食の信仰者だった。ありとあらゆる健康上の問題は、

正しい朝食によって解決されるのだと、確信しているようだった。
「ほら、パン焼いたんだから、食べてきなさいよ。何も食べないんじゃ、学校行ったって、勉強にならないでしょ」
大きなお世話だ。その時あたしは毎朝、そう思ってた。お母さんに半ば強制されて、トーストを一枚、喉に押し込んで出かける。その結果あたしは、学校に向かう地下鉄に乗るのを一本遅らせて、駅のトイレでげえげえ吐くのだった。あたしは絶望的なまでの低血圧で、起きてから何時間かしないと、胃袋まで血流が届かなくて、食べ物を受け付けないのだ。
「ご飯食べたくないんだったら、牛乳くらい飲んでいきなさい。大体あんたは、ご飯食べなさすぎるのよ。ダイエットするほどのこともないでしょ。もうちょっと食べて、体強くしなきゃ」
朝食作戦があたしに通じないことが分かってくると、お母さんは朝の牛乳作戦に切り替えてきた。このあたりが妥協点だと分かり、あたしも応じた。それ以降、毎朝一杯の牛乳が、あたしの日課になった。冬にはあったかい牛乳になったり、時にはロイヤルミルクティーだったり、ココアだったり、カフェ・オ・レだったり。ああ、そうだ、カフェ・オ・レ。コーヒー牛乳。美味しかったな。
毎朝の牛乳のせいであたしは、本の中のミルク・コーヒーに過剰に反応したのかもしれない。母親の柩の横で主人公が飲むミルク・コーヒーの、美味しそうなことといったら。ああ、そうか。お母さんもお父さんもみんな、この『おしまい』で死んじゃったんだろうな。きっと。そう考えても涙も出てこないあたり、あたしも十分、おかしいのかもしれない。
あの本も読みかけだったんだ。あたしは急に、続きが読みたくなった。どんな話だったっけ。最初の書き出しはこうだ、「きょう、ママンが死んだ。」だけど次のセンテンスがもう思い出せない。話の筋も、飛び飛びにしか覚えてない。確か、最初にお母さんが死んだって電報もらって駆けつけて、それから女の子と海辺でじゃれ合って、それから？　――どうしてあの主人公は、人を殺したんだったっけ？　それは太陽のせいだ、って主人公が法廷で答える、そのシーンは有名なはずだ。だけどあたしは、まだそこまで読み進んでいない。あたしが読んでいたのは主人公が逮捕されて拘置されて、それから――ああ、ちゃんと覚えてない。
思い出せないと分かった途端に、イライラする。このお話を思い出すことが、とても切実なことであるように思えてくる。それもこれも、今のあたしが置かれているこの、極限状態のせいだ。同じような極限の状況下で、死に物狂いでダンテの『神曲』を暗誦した人がいたな。誰だっけ。確か、イタリア人。パヴェーゼじゃなくて、エーコでもなくって……レーヴィだっけ？
活字のない世界で人間が正気を保つのは、なかなか難しいのかもしれない。それでもその『神曲』を暗誦したイタリア人の誰かさんは、それを語る相手がいただけ、恵まれていたのだ。あたしが置かれている、この『おしまい』直後の状況は、その悲惨さを語らいあう相手もいないという、絶望的な状況だ。
活字。文字。コミュニケーション。
どうしても、思い出さなくちゃいけない。きょう、ママンが死んだ。そしてそれから、どうなった？　主人公の名前は何だっけ、マルソーだっけムルソーだっけ。とにかくその主人公の青年が、人を殺す。武器はピストル。ああ、そうだ、地中海の太陽の眩しさと、その光を受けて輝くナイフの眩しさ。思い出した。主人公はそのナイフの眩しさを冷静に見つめながら、銃弾を撃ち込んでいく。その冷静さがきっと、決定的に重要なんだ。
ああ、誰かに話したい。それが不可能でも、せめてあの本をもう一度読み返したい。そうでなかったら、自分が今考えていることを、何かに書き留めておきたい。紙とペン、どっかに落ちてないかな。

活字への渇望を満たしてくれるアイテムを持っていることを、あたしは夕方になってようやく思い出した。昨日拾った携帯電話。いくら旧型のやつっていっても、メール機能くらい付いてる。
少しは柔らかそうな土の地面を今夜の宿に決めて、あたしは座り込み、残り少なくなったコーラをもう一口だけ飲んだ。それから、携帯電話のキーロックを解除し、メールの履歴を見る。液晶画面のドットが形成する文字。漢字。ひらがな。カタカナ。ことばが存在する、そのことは確かに、かつてこの世界にあたし以外の人間が存在し、互いにコミュニケーションを取り合っていたのだという事実を、思い出させてくれる。
だけど――すぐに、がっかりさせられた。メールの履歴、ろくに残ってない。受信メールを開くと出てくる件名はほんの数件。しかも、件名欄はどれも空欄。試しにひとつ開いてみる。
「六時までに一旦帰社せよ」
どうやら最初に予想したとおり、この携帯は仕事用だったらしい。ちっとも面白くない。メールの送信元も「川口」とかいう同じ名前が連なっている。会社の上司か同僚か。メールの内容も、事務的な連絡事項だけだ。
……そんな中に一件だけ、タイトルの入ったメールを見つけた。件名は「ごめん」、開いてみると、差出人は「みゆ」。

「少し遅れる」
　メール本文の内容は、たったそれだけ。だけど、そのたった五文字の文章を見た途端、何故だか涙が出そうになった。「ごめん」そして「少し遅れる」。そこには、ビジネスライクな連絡とは異なる、血の通った何かを感じる。ごめん、少し遅れる。送信された時間は金曜の夜の七時三十分。うん、この「みゆ」さんは、この携帯の持ち主である男の人の、恋人だ。そうに違いない。金曜の夜の七時半。間違いなく、デートの約束。仕事が長引いたんだろうか？　彼女は待ち合わせ場所に、だいぶ遅れてやってくる。彼はもうずっと彼女を待ち続けている。携帯灰皿が、吸殻でいっぱいになる。ポケットに無造作に突っ込んだままの手のひらが、少しだけ汗ばんでくる。彼女がようやく姿を現す。彼を見つけるとミュールの踵をカツカツと鳴らしながら小走りに近づいてきて、それで――

「――ごっめーん。もしかして、ずっと待ってた？」
　誤魔化すように笑いを浮かべながら、美雪が言う。美雪はとある小さな旅行会社に務める二十三歳。だけど、歳よりずっと、幼く見える。くりっとした丸い瞳に、小さな顔の、可愛らしい女の子。
「そりゃあ、待ってる以外にないからね」
　苦笑いを浮かべながら答える、男の名は祐一。事務用品を扱う会社の営業さん。オフィス街のビルに片っ端から飛び込んでいって、ペン一本でもノート一冊でも、何でもいいから契約を取ってくるのが仕事だ。歳は……美雪より、ちょっと年上。
「だってさーあ、午後になって急に、奈々子がお腹痛いから帰るって言い出してさ。おかげで今日は、大変だったんだから。二人分働いたんだからねっ」
　金曜の午後八時過ぎ。オフィス街の一角。美雪のお化粧は少し崩れ始めてたし、祐一のワイシャツは背中が汗でぴっとり貼りついている。すぐ隣を、千鳥足のおっちゃん三人組が通り過ぎていく。駅前では鞄を広げて、自分の書いた詩を売る青年がいる。高校生の女の子たちが、ハンバーガーの包みをくしゃくしゃっと丸めて、道端に投げ捨てる。そんな午後八時過ぎ。
「うん、別に、遅れたのは構わないけど。とりあえず、腹減った」
「そうだねー、あたしもお腹減った。ね、なんか美味しいもん食べに行こっ。何がいい？」
「っていうか、どっちかっていうと、牛丼とか立ち食いそばとかそんな気分」
「……祐一さぁ、時々あたしが女の子だってこと忘れてるでしょ」
「まあ、しょっちゅうだな」
　美雪がぷっと頬を膨らませて、その頬を祐一が人差し指で突っつく。いつもこんな感じだから、美雪は時々不安になる。友達の延長線上のような恋人。それは確かに楽しいし心地よくもあるんだけど、このひとは本当に自分のことを好きなんだろうか、と疑ってしまうことがある。
　美雪の高校の同級生が、先月結婚した。避妊に失敗した、いわゆる「できちゃった婚」だ。美雪も結婚式に行ったけど、ばっちりお化粧して、髪の毛綺麗なアップにして、プリンセスラインのふわふわのドレス着た彼女は、とっても素敵だった。だから、というわけでもないのだろうけど、美雪は、このひといつかあたしと結婚してくれるのかしら、なんて不安を感じている。
　だけど、美雪は知らない。祐一が、美雪が思っている以上に、小心者だっていうことを。ボーナスが出たから、祐一は美雪に内緒で、先週、宝石屋さんに行って来たんだ。お給料の三ヶ月分、なんてデビアスの広告真に受けたわけじゃないけど、何十万もするダイヤの指輪買うなんて、ちょっと、いやかなり勇気がいる。何の相談もなしに、勝手に指輪なんか買って、しかもそれが婚約指輪だなんて言ったら、美雪は怒っちゃうんじゃないかって、祐一は祐一で不安なんだ。だけど、指輪でも買わないことには、プロポーズのきっかけなんて掴めないから、思い切って買っちゃった、ダイヤの指輪。そして祐一は、指輪を渡すタイミングを測りかねている。
　酔っ払いのおっちゃんと祐一の肩がどしん、とぶつかって、祐一の持っていた仕事カバンが吹っ飛ぶ。カバンの口がちょっと開いてたみたいで、中身がばらばらっと歩道に散らばる。しょうがないなぁ、とか言いながら、散らばった中身を美雪が拾い上げる。しゃがみこんで、ふと、ちっちゃな紙袋の上で、手が止まる。美雪と祐一の手が紙袋の上で重なったまま、動かない。エメラルドグリーンの袋には、ティファニーのロゴがあって、それで美雪は何も言えなくなって……。
「……なーに考えてんだろ、あたし」
　思わず声に出して呟いてしまった。何だか、すごく空しい。馬鹿げてる。携帯電話に残ったたった一通のメールから、ずいぶん妄想を膨らませたものだ。大体、この「みゆ」さんの名前が美雪だとは限らないし、だいいち祐一って誰だ、祐一って。そもそも、二人とも今頃どっかでケシズミになってるに違いないのだ。
　あたしはもう一度メールを見返した。「少し遅れる」……そうだ、待ち合わせなんて概念も、『おしまい』と一緒に終わってしまったのだ。もうこの世界では、何時何分にどこへ行く、なんて必要はなくなったのだし、そもそも時刻とか位置座標なんてものが、『おしまい』以前と同じように保持されている保証もない。ごめん、少し遅れる。そんなメールが送信されたのは金曜の夜七時半。だけ

ど、今日はいったい何曜日で今は何時なのだろう。もちろん、携帯を待ち受け画面に戻して、カレンダーと時計を確認すれば分かることではあるのだけど、そんなものに、もう意味はないように思える。

メールの件名表示に戻り、もう一度メールを一件ずつ確認していく。着信時刻。ほとんどが、平日の昼間だ。社に電話しろ十時十四分、一旦戻れ十四時二十二分、在庫確認しました十一時五分、云々。何のことはない、一昔前の社用ポケベルと同じノリだ。

携帯のメモリーに残っていたメールは全部で十一件。上から順に一件ずつ見ていくと、九件が会社関係のメール。十件目に先程の「みゆ」からの「少し遅れる」メール。そして、十一件目に、奇妙なメールが入っていた。

「subj：誰かいますか？
**　届いてたら返信ください」**

件名一行、本文一行のごく短いメール。つくづくこの携帯の持ち主の周りには、長文のメールを書いてよこす人間がいなかったと見える。それにしても、メールみたいに特定の人間に対して送信するもので「誰かいますか」はないだろう。送り先と違う人が出てきたらそれはちょっと異常だ。

送信元は「神岡」となっている。苗字だけでは男なのか女なのか、いくつくらいの人なのか、さっぱり分からない。試しに住所録を確認してみると、この神岡さんは《大学》にカテゴリ分けされてあった。学生時代のお友達かな。記録されている情報は、名前のほかはメールアドレスと携帯番号だけだ。

再び、メール画面に戻る。「届いてたら返信ください」まるで届かないことを前提としてるみたいだ。不安定な通信機器で、通信テストをやってるみたい。もしもし、もしもし、聞こえますか、どうぞ。そんなポンコツの携帯電話を使っていたのだろうか。送信時刻を見る。――そしてあたしは、心臓が止まりそうになった。

「date：20XX. 09. 14　06：55」

九月十四日の六時五十五分。あたしは慌てて携帯を待ち受け画面に戻す。カレンダーが表示されている。九月十五日のところに、マークがついている。今は九月十五日の午後六時二十分。この携帯電話のカレンダー機能を信頼する限り、このメールが到着したのは、昨日――つまり、『おしまい』より後だ。

メールが届いた？

『おしまい』より後に、通信が維持されている場所があった？　ううん、そんなことより大切なのは、『おしまい』の後にこのメールを送信することのできた「誰か」がいること。何か機械のエラーとかでなければ、この世界のどこかに、あたしと同じように生き残り、携帯電話を手にした、誰かがいる。

生きている人がいる！

突如、体ががくがくと震えだした。あんまり震えるから、手に持っていた携帯を落としそうになった。全身の血液がさぁっと足元に落ちていき、それから一気に脳天まで上がっていくような感覚。生きている人がいる。この地上に、それも、あたしと同じ日本語を用いる範囲内に、生きている人がいて、あたしにメールを送ってきた。厳密に言えばあたしに、じゃない。どこかに生きてる人がいないだろうかとメールを出してみて、それをたまたま偶然、あたしが受信した。誰かいますか。誰か。ほとんど悲痛とも言える叫び。沈没する船から、ガラス瓶に手紙を詰めて流す、そんな感じだ。そしてそれを、別の場所で沈没しかかっているあたしが見つけた。これはもう、奇跡だ。

そうだとすればあたしは、このメールの主、神岡さんに、返事を出さなければならない。どっかアンテナの立つ場所を見つけて、メールを出さなきゃいけない。一刻も早く。どちらかが力尽きて倒れてしまう前に。

翌日の朝早くから、あたしは歩き始めた。食べ物、飲み物、携帯のアンテナの立つ場所。どれかひとつでもいいから、見つかってほしい。

『おしまい』の後に届いたたった一通のメールが、ずいぶんあたしを勇気付けてくれたものだ。とにかく、自分以外にも誰かが生きている可能性がある。アンテナさえ通じればこの神岡さんと連絡が取れるし、そうでなくても、もしかしたら歩き回っているうちに、他の生存者と出会える可能性だって、皆無ではないのだ。

コーラは既に底をついていた。空になったペットボトルの底に、茶色い汚れがほんの少しこびりついているだけだ。それでもあたしは、そのペットボトルを捨てることができずに、持ち歩いている。差し当たり最優先事項として、水だ。このままでは、ひからびるのも時間の問題だ。たとえ今食料を見つけたところで、唾液だって一滴も出ないのだから、到底食べられやしない。だからとにかく、水。

やみくもに歩いていたつもりが、気がつくと、校舎らしき建物の前にいた。半分以上吹き飛んで崩れ落ち、もはや原型をとどめていないけれど、その立地と微

かに残った壁面などから、それが、自分が数年前通っていた小学校であることを理解する。立派なものだ。これだけの大破壊にあって、周囲の立派なマンションやショッピングモールは跡形もなく消し飛んでしまっているのに、小学校は地面に接した、基礎に近い部分は比較的形が残っている。やっぱり、小学校の校舎はずいぶん頑丈に作られているんだなぁ、と感心した。

いや、感心してる場合じゃない。

建物が比較的無事ということは、その中の施設も何か無事で残っている可能性があるということ。あたしはかつて廊下や教室であった場所を、つぶさに調べてまわる。小学校だからお菓子や食べ物を持ち込んでる人はいないだろうけど、水道のひとつでも生きていればラッキーだ。実際、蛇口部分が無事に残っているものはいくつかあって、あたしは少なからぬ期待とともに水栓をひねってみるのだけど、残念ながら、六つの蛇口から得られた水は全部でたったの三滴だった。さすがに、水道管はどこかで途切れてしまったのだろう。

ああ、水、水。どこかでちゃぷん、という水の音が聞こえた気さえした。よっぽど渇いてるんだな、あたし。小学校にいると、不意にプールの匂いを思い出す。四角い石の箱にたっぷりと水を湛え、塩素の香り、プールサイドを走り回る子供たち、更衣室のむわっとした空気……

ちゃぷん。

――幻聴じゃない？　今、確かに、水の音が聞こえた。どこかに水があるのだろうか、それとも、ありもしない水の音を何度も聞いてしまうほど、あたしの神経はすり減っているんだろうか？

ともかく、音を頼りに、誘われるように歩き出す。校舎の外に出た。校庭……じゃない。おそらく、裏庭部分に当たるのだろう。かつては木や草が植わっていたり、教育の一環で児童たちが花壇の手入れをしたりしていた場所が、今や草の一本も生えていない。……

ちゃぷん。

今度はとても確かに、水の音が聞こえた。間違いない、この近くだ。あたしは振り返る。ふっ、と小さな物影が反応し、それからさっ、と逃げ出すようにいなくなってしまう。大きさからすると、ドブネズミか何かだ。――ドブネズミ。ともかく何か、生き物がいる！

あたしはさっきまで物影のいたところに駆け寄る。

ちゃぷん。水音の正体はそこにあった。固く乾ききった土の間から、そこだけ、水がこんこんと湧き出ている。高さ二センチにも満たない小さな水柱。だけど、そこでは絶えることなく、地面の奥から水が湧き上がってきているのだ。水！

水だ！

あたしは駆け寄る。半径二十センチ足らずの、ごく小さな水たまり。とにかく、ここでは新鮮な水が湧き出ているのだ。あたしは両手を伸ばし、水をすくい上げる。少し泥が混ざっていたけど、とにかく、水だ。たまらず口をつけて飲み干す。思いのほか、冷たい。

だけど、どうしてここだけ水があるのだろう？　地下に水道管でもあったのだろうか？　小学校という施設の性質上、非常用の貯水槽か何かがあったのかもしれない。理由はわからない。だけど、とにかくこの水は生命線だ。あたしはお腹がたぷたぷになるまで水を飲んでから、持っていた空のペットボトルに、いっぱいになるまで水を注いだ。ペットボトルに蓋をして、それからあたしは、おもむろに顔を洗った。

少し離れたところから、視線を感じた。顔を上げると、崩れかけた壁の上からあたしを見張っているドブネズミと目が合った。せっかくの水場を荒らされたことに、不快さを表しているようにも見えた。やあ、とあたしは片手を挙げた。ドブネズミは応じなかった。きい、だかぎい、だか声を上げると、またちょろっと瓦礫の隙間に姿を消した。とにかく『おしまい』の後に見た初めての生き物だったから、あたしは親近感を覚えていたのだけど、先方はそうでもなかったらしい。あたしだって今はこのドブネズミを友人のように感じているけれども、いよいよ切羽詰まったら、とっ捕まえて皮を剥いで食べちゃうかもしれない。そんなものだ。

水が湧き出し続けている限り、しばらくはここを拠点にしようと思う。あたしは微かな期待を持って携帯電話を取り出した。残念ながら、ここでもアンテナは立たなかった。

どこかに生存者がいて、メールを送ってきた。水が残っていた。ドブネズミもいた。たったそれだけのことだけど、あたしはずいぶん気を取り直した。なんか、あたしも生き残れるかもしれない。

だけどいくら歩き回っても携帯のアンテナは立たないし、お腹も減ったし、腐りかけの死体も二つ見た。日が暮れ始めるとあたしは途端に、鬱屈した気分になった。あたしも生き残れるかもしれない。それはいい。だけど、生き残ったとして、それからいったい何があるっていうんだろう、こんな世界で？　生き延びることに何の意味があるっていうんだ？　いっそ『おしまい』で死んじゃった大多数の皆さんの方が、あたしなんかよりよっぽど、幸せだったんじゃないか？

なるほど、この携帯にメールを送ってきた神岡さんのように、この世界のどこかには、あたしと同じように生き残った人がいるのかもしれない。だけどもう『おしまい』から何日も歩き回って、あたしはついにドブネズミ一匹の他に、誰とも出会うことはなかった。この先何十年歩き回っても、同じことかもしれない。この状況では「生存者が集まって力を合わせて生きていく」なんて絵空事だし、それどころか、あたしが誰かと言葉を交わす機会なんてもう、訪れないんじゃないだろうか。そのうちあたしはすっかりケダモノになって、この荒れ果てた大地を四つん這いで駆け回りながら、あのドブネズミと死に物狂いでエサを奪い合うのだろう。

すごく、胸が苦しい。息が重い。吐き気がする。何だろう、この感覚は。食道か気管のどっか奥の方に固形物が詰まってるような、そんな気がする。耐え切れず、あたしは両足をいっぱいに開き、空の方を向いて、叫んだ。

「うわあああああ――――――っ」

横隔膜が、腹筋が、びゅんびゅん震える。全身の血管がざわつく感じがする。半分寝ぼけていた体中の細胞がようやく目を覚まし、遅まきながら活動を再開する。そんな感じ。あたしは大股に歩き出しながら、忌々しい夕日を睨みつけ、なおも叫んだ。

「あ、え、い、う、え、お、あ、お！　か、け、き、く、け、こ、か、こ！　生麦生米生卵、なまむぎなまごめなまたまご、東京特許許可局局長！　有澤瑠璃子十六歳、都立高校二年生、趣味は読書、特技バイオリン！　彼氏ナシ！　ついでに処女！」

半ば忘れかけていた感触だった。新鮮な空気が肉体の内側を駆け抜けていき、それでようやくあたしは、自分が人間であったことを思い出す。そうだ、あたしは人間だ。生き延びることに必死で、そんな簡単なことさえ、忘れていた。あたしは人間だ、ケダモノじゃない。ちゃんと考えて、笑って、悲しんで、喋ることができる。

鮮烈な風がすっかり体を通り過ぎていくと、あたしは途端に寂寥感に襲われる。人間であることを思い出したあたしは、ついでに悲しさも思い出した。今なら『神曲』を暗誦した強制収容所の詩人の気持ちも、きっとよく分かると思う。話さなければならない。誰かと何か喋る、っていうことをしないと、きっとあたしは、早晩、発狂する。

「有澤さぁ、オレと付き合わねー？」

何を血迷ったか、タクトのバカがそんな寝言をほざいたのは、オレンジ色の夕陽が差し込む教室。その時なぜかあたしとタクトは教室に二人きりだったんだけど、どうして他に誰もいなかったんだろう？　よく覚えてない。

「はぁ？」眉毛の間にシワ作って、あたしはそう答えたんだった。「何それ、新しいギャグ？」

「いやマジでマジで。大マジ」

「冗談。大体、なんであたしなわけ？　一緒に図書館でも来る気あんの？」

「あー、ってゆっかさー、ぶっちゃけ、言っていい？　付き合いてーっつーかさぁ、お前とヤリたい」

「はっ」鼻で笑う。「バカ言わないでよ。ヤリたいんだったら別にあたしじゃなくてもさ、他にいくらでも、頼めば足開いてくれる女子いんでしょ、あんただったら。あんたのどこがいいのか知んないけど、いっぱいいんじゃん、取り巻き」

「つっかさー、オレ、あいつらじゃダメなんだわ、なんか。やっぱお前とヤリたいんだよね」

「ヤリ過ぎで飽きてるだけじゃないの？」

「そうかもしんない」

タクトは笑う。あたしは、唇の端さえ動かさない。精一杯冷たい視線で睨んでるつもりなんだけど、タクトはまったく気にしてない風で、えへらえへらと例の軽薄な笑いを浮かべたまま、たわごとを口にし続けるのだ。

「でもさー、他の女子じゃ全然ダメで、有澤とヤリたい、有澤以外とはヤリたくないってのは、なんかオレ、すごくねー？　もうさ、一種の愛だよねー、愛」

「性欲じゃん」

「そうとも言う」ほんとに何言われても、タクトはへこたれない。「まあ、オレにとっちゃどっちでも大差ないし。大事なのはさ、有澤でなきゃダメだ、ってとこなんだけどさ。何でだろうな、ぶっちゃけ今まではさ、女なんて穴開いてりゃみんな一緒、ぐらいに思ってたんだけど、何でこんなに有澤とヤリたくなったのか、自分でも分かんねー」

「……」

いい加減あたしは、反論する言葉が尽きてきた。マジで困ってる様子が、タクトから見ても分かったんだろうか。タクトは机の上に放り出してあった制服の上着を、ばさっと肩にかけると、相変わらず軽薄な口調で、こう言ったのだ。

「まぁ、考えといてよ。んでさ、ヤッてもいいかなーって気になったら、いつでも言ってちょーだい。別にオレ、急がないし。有澤がその気になるまで、オナニ

ーして我慢してっから」
「……バーカ」
もはや呆れる以外にない。
タクトは教室を出て行こうとして、扉の前でわざとらしく足を止め、振り返り、こう付け加える。
「あとさ、参考までに。オレ、けっこう巨根」
「いいから、もう黙れって」
タクトは勝ち誇ったようににやり、と笑った。それがますます、あたしを不愉快にした。

――不覚にも、タクトの夢なんか見てしまった。辺りが暗くなるのに合わせて、座り込んでうとうとしてしまったことを、あたしはようやく理解した。どうやら、ちょっと疲れてるらしい。当たり前だ。毎日食糧や水を求めて強い日差しの下を徘徊し、夜は石ころ混じりの固い地面の上で眠る。疲れが取れるはずがない。
それにしてもどうして、よりにもよって、タクトの夢なんだろう。もっと他に思い出すべき人とか物とか、いろいろあるはずなのに。お父さん、お母さん。柴犬のポンタとセキセイインコのルル。それからユミとマドカとエリコとメグと……あれ？　そんなもんだったっけ？　もっといっぱいいたはずなのに、友達とかの名前が思い出せない。あたしの交友関係は狭い方だったけど、それでも、十人やそこらは、大切な友達がいた。はずだ。なのに、今や彼女たちの名前すら満足に思い出せず、そしてあたしはうたた寝してあのバカなタクトの夢を見る。自分で自分に腹が立つ。
思い出せ、思い出せ。あたしは額の真ん中に人差し指を当て、必死で自分の頭蓋骨に言い聞かせる。思い出せ、思い出せ。だけど高校の友達も近所の人たちも、その輪郭だけがおぼろげに脳裏をかすめて行くだけで、明瞭に像を結ぶことができない。こんなもんか？　あたしは、こんなにおバカだったか？
考えれば考えるほど疲労が蓄積していく気がして、それであたしはそれ以上何かを思い出そうとすることを諦めた。そうだ、きっと、こんなもんだったんだ。思い出そうとしても思い出せないのは、何ひとつ重大なことがなかったからだ。朝起きて、学校行って、買い物行って、マックとかスタバとか行って、みんなと別れてから図書館に本返しに行って、家帰って、ごはん食べて、お風呂入って、寝る。そんなことはあたしにとって、どれひとつとして重要じゃなかったんだ。
なんだ、じゃあ、同じじゃないか――『おしまい』であたしは、大切なものをぜんぶ失ったものだと思っていた。だけど、大切なものなんて、最初から何ひとつなかった――あらかじめ、ぜんぶ失われていたんだ。『おしまい』の前も後もない。みんな、一緒だ――。
全身をけだるい疲労感が包んだ。余計なことを考えたせいだ。それなら、もう一眠りしよう。無駄なエネルギーを消耗することはない。あたしはそう思って、寝る前に時間を確認しようと、携帯電話の液晶画面を見た。九月十六日、十八時五十分。例によってアンテナは立たない。画面の右上隅に、封筒のマーク。
……封筒のマーク？
何かのスイッチが入ったみたいに、あたしは飛び起きる。封筒のマーク。機種が違っても、ほとんどの携帯電話で、このマークの表す意味は共通だ。キーを押す。受信メール一覧。未開封のメールが一通。未開封。新着メール。

「date: 20XX. 09. 16　17: 37
subj: 誰か生きてますか？
このメールは『おしまい』より後に送信しています。
届いてたら返事ください」

今日の午後五時三十七分。一時間とちょっと前。あたしがここでうたた寝してる最中に、そのメールは届いていた。送信元は前と同じ「神岡」さん。
あたしがここでうたた寝してる最中。
ということは、あたしもこの携帯電話も、この近辺から動いていない。それなのにメールを受信した。つまり、このへんのどっか遠くないところで、アンテナが生き残っていて、それであたしは電波を受信することができる。
もう一度液晶画面を注視する。「圏外」の文字が寂しく浮かんでいる。携帯電話のちっちゃなアンテナを、しゅるしゅると伸ばす。それから、そうだ、機体を縦にするといいんだっけ。あたしは立ち上がって、顔より少し高いところで、携帯を縦にして持つ。まだ圏外だ。アンテナサーチのボタンを押す。
――ほんの数秒が無限のように感じられた。やがて画面の端から「圏外」の文字が消え、その場所にアンテナのマークが、弱々しくも一本だけだけど、表示された。
アンテナが立った！
鼻息が荒くなる。心臓がばくばく鳴り出して、ほっぺたに熱がこもる。落ち着け、落ち着けあたし。とにかく、この神岡さんにメールを返すんだ。メニューから「返信」を選択。ああ、だけど、何を書いたらいいんだろう。書きたいことは

山のようにあるはずなのに、まっさらの入力画面を目の前にして、あたしは頭真っ白。どうしよう、どうしよう。

あたしの他に生存者がいる。聞きたいことはいっぱいあるんだ。男の人か女の人か。歳はいくつか。今どんな状況で、どうして生き残って……ああ、そうじゃない。話がしたい。断片的な情報を集めることより、とにかく何でもいいから話がしたいって、そう思ってたんだ。くだらない話題でもいい。誰かと何か喋らないと発狂しそうだって、ああ、だから、つまり、会えればいいんだ。

「subj：Re: 誰か生きてますか？
こちら葛西。そっちはどこ？」

それだけ入力して慌てて送信する。とにかく、場所が分かれば会えるかもしれない。あたしが『おしまい』のときにいた場所が東西線の駅近くだったから、若干歩いたにせよ、おそらく葛西からそんなに離れていない。山手線管内とかだったら、頑張って歩いていけば会えないこともない、はずだ。

返信、返信。あたしはもう携帯を握り締めるようにして、神岡さんから返事がくるのを待つ。途方もない時間が過ぎたような気がして、液晶画面の時計に目を落とすと、ほんの二、三分しか経っていない。誰かに告白して返事もらうときみたいにソワソワする。いや、告白なんてしたことないけど。

だけど本当に返事が戻ってくるのだろうか？　そもそも、この神岡さんのメールにあたしが返事を出したのだって、メールが発信されてから一時間経過してからのことだ。先方だって状況はおんなじかもしれない。あたしが一時間もメールに気づかずにいる間に、向こうも寝ちゃったかもしれない。歩き出して電波の圏外に出ちゃったかもしれない。

そうだとすると、このメールにいつ返事が返ってくるのか、それどころかちゃんと返事が来るかどうかだって、定かじゃないんだ。あたしはまた不安になった。変に期待した分だけ、ますます不安になった。メールを返信するかどうかは、向こう次第だ。ひょっとすると、あたしのメールの内容が気に入らなくって、返事なんか書かないかもしれない。

ああ、こんなことなら、もっと丁寧に書けばよかった。やっぱり最初は「こんにちは」とか「はじめまして」にすればよかった。そうでなかったら「十六歳の女子高生です」とか書いたら、間違いなく返信が来たんじゃないか？　って、出会い系かよ。

いろいろなことが頭の中を駆け巡る。しばらく待ったけれど、返信は来ない。向こうがどこにいてどんな状況なのか分からないから、どうしようもない。気がつくと、携帯の時計は十九時三十分を過ぎていた。あたしは来るか分からないメールの返事を待ちぼうけて、三十分以上もこうやって携帯抱えて突っ立ってたわけだ。途端に、自分のやっていることは、風船に爆弾くっつけて敵国に飛ばすような、そんな望みの薄い、他人から見たら馬鹿げたことのような気がしてきて、空しくなった。

その晩あたしは、携帯を鼻先に置いて寝た。

熟睡してしまったのだろうか？　着信に気づかなかったけれど、目が覚めると同じように、携帯の液晶画面に封筒マークが表示されていた。夜中のうちに件の「神岡」さんからメールがあったらしい。着信は午前二時過ぎ。あたしの目が覚めたのが六時ごろだから、四時間も返事出さずに放っぽらかしにしてしまった。若干申し訳ない気持ちが半分、ちゃんと返事が来たことで嬉しい気持ちが半分。半開きの瞼をこすりながら、メールを開く。

「subj：Re: Re: 生きてますか？
宮の森」

……宮の森？

聞いたことのない単語にあたしは戸惑う。宮の森って、何だ？　このメールはいったい何が言いたいんだ？　さっぱり、意味不明だ。

少し冷静に考え直してみる。このメールは、あたしが送った「そっちはどこ？」って内容のメールに対する返信だ。ということは、このメールの本文は「神岡」さんが今どこにいるかを表している。「宮の森」っていうのはきっと、地名だ。そこまでは分かった。だけど、そんな場所聞いたこともない。

幸い今朝も、アンテナは一本立っている。あたしはすぐに返信を入力し、送信する。

「subj：宮の森
って、どのへん？」

それからあたしは、携帯を手に持ったまま歩き出す。誰かと言葉を交わすことができる喜びに浸っていても、飢えや渇きから開放されるわけではなかった。昨

日見つけた学校の跡地、水場に向かって歩いている。とにかく、水源が枯れていないことを祈った。

水を飲み、顔を洗って、それからしばらくの間、あたしは携帯の画面を注視したまま歩き回るという作業に没頭した。どのくらいの範囲内で、どの程度アンテナが立つのか、知りたかったのだ。

昨夜から今朝にかけてメールを受信した辺りでは、アンテナがぎりぎり一本。そこから少し南の方――『おしまい』を経た後でも太陽が南中するという仮定の下でだけど――に歩くと、さっきまで消えたり出たりしていたアンテナが、常時立つようになる。電波の強くなる方へ向かって、歩いていく。

しばらく歩を進めると、ついにアンテナが二本になる。携帯電話の液晶画面ばかり見ていたあたしが、ふと顔を上げると、そこには瓦礫の山。今まで見たことのないほど大きな山だ。あたしの背丈ほどの大きさに分割されたコンクリートの壁が、ごろんごろんと地面に積みあがっている。何か大きな建物が崩れ落ちた、なれの果てなのだろう。

コンクリの隙間を縫って、瓦礫の中に踏み入ってみる。およそありとあらゆる建造物が失われてしまった『おしまい』後にあっては、日陰、というのは貴重な環境だ。コンクリの陰に入ると、ひんやりと涼しい。

ひょっとしてこれって、あたしが最初にいた辺りなんじゃないか、と思う。『おしまい』の直後あたしは、膨大な瓦礫の山をかき分けて表に出てきた記憶がある。なんか、そのときの雰囲気に似ている。携帯を拾ったのもおそらく、この近くなんじゃないだろうか？

あたしの身長よりずっと大きなコンクリートの破片が二枚、互いに寄りかかるようにして立ち、日陰を作っている。そうだ、あの陰で用を足したんだった。って、そんなことで思い出すのも情けないけど。このへんのビルやなんかで、あんな巨大なコンクリートの塊を使うような大きな建造物が、あっただろうか？　と考えて、あたしは不意に思い出す。ああ、そうか。高速道路の橋脚か。

ということは――現在午前十一時、太陽はほぼ南か南南東といったところ――たぶん、南に向かうと駅があって、そこから少し先に行くと、飲食店やコンビニが並んでいたはずだ。

しばらく歩くと、あたしの読みが的中していたことが分かる。元の形状が予想できないほど粉々になって折り重なった瓦礫の山を、注意深く見ていくと、かつて線路であったと思しき鉄の棒が、ぐにゃりと曲がって突き出ているのを発見した。このへんが駅。ここから東西に高架式の線路が走っていて、そのガード下は飲食店や何かが立ち並ぶ商店街だった。飲食店。それなら、何か食料品が落ちているかもしれない。

地理感覚を取り戻した途端に、脳の活動が活発になる。そうだ、このへんに駅の改札があったとして、このへんにハンバーガーショップ、このへんにコンビニ、あとそっちが牛丼屋で飲み屋でとんかつ屋……この惨状でも無事に残っている食料品があるとすれば、何だろうか？　缶詰とかレトルトパック、常温保存食品の類。乾パンとかビスケットみたいなものがあれば、理想的だ。ああ、冬山で遭難した人が、チョコレート持ってて助かったって話よく聞くなぁ。チョコレート落ちてないかな。ああでも、この暑さじゃどろどろに溶けて形もないか。

瓦礫の中に、喫茶店の看板を発見する。いつもお店の前を素通りするだけで、一度も中に入ったことのなかった喫茶店。プラスチックの看板が熱でぐにょぐにょに曲がって、だけどどうにか、店名の一部が確認できる。あたしはその辺りの石やら鉄筋やらを掘り返し始めた。大きなコンクリートの塊を両手でよいしょ、と押し上げ、その隙間に肩から体ごと押し込んで、背中の方に押しやって、向こうへ捨てる。そんな作業を何度か繰り返すと、次第に、ひんやりと湿った空気がにじみ出てくる。

いくつめかの石を持ち上げた瞬間、かさかさ、と足元を何かが通り過ぎた。はっきりとは見えなかったけど、あの動き方はきっとゴキブリだ、とあたしは確信する。核戦争の後でも富士山が大噴火しようともゴキブリは生き残る、なんて話どこかで聞いたっけ。核ミサイルより火山より、もっと苛烈な『おしまい』の後だけど、ゴキブリはちゃんと生き残ったんだ。あたしはちょっと感心した。

いや、感心してる場合じゃない。

その石の下にあたしが発見したのは、死体だった。ずっと瓦礫に埋もれていたせいだろうか、これまでに見てきたどの死体よりも、腐敗や損傷が少ない。とはいえ、首や胴はありえない方向にねじれ、眼球は抜け落ちて窪んだ眼窩だけが深い闇のようにあり、肋骨が皮膚を突き破って外に出ていた。

若い男の死体だった。軽めにブリーチのかかった茶色の髪と、左耳にピアスが三つ。ハイビスカス柄のTシャツとだぼだぼのパンツ。何だか、タクトに似ているな、と思った。実際のところあたしは、タクトの顔を正確に思い出すことができずにいた。記憶の中で、若干美化されてきてしまっているようにも思えた。目の前の死体はタクトであるようにも、まったく別の知らない人間のようにも見えた。あたしには、どっちだか分からなかった。

あたしはしゃがみこんで、もっとよくその死体を見た。腐臭がつん、と鼻を刺

す。死体の鼻の穴がもそっ、と動いて、中から真っ白い蛆虫が姿を現した。蛆虫は太陽の光に驚いたように、すぐに鼻の穴の奥へ戻っていった。

「……バーカ」

あたしは小さくそう呟いて、死体のお尻のあたりを、軽く蹴っ飛ばした。

「あたしとヤリたかったんじゃないの？　だったら、生き残ってりゃよかったのに。今、もし生きてたら、何発だってやらせてあげるよ。なのにさぁ……死んじゃったらさぁ……蝿のエサじゃん」

その死体がタクトであるという自信はなかった。どちらかといえば、別人である可能性の方が強いようにも思えた。だけど、あたしはそのとき確かに、タクトに向かって話しかけているつもりだった。どっちにしても、タクトはもう生きていないのだ、と分かっていた。だから、目の前の死体がタクトであろうとなかろうと、結局は同じだ。

あたしはその死体の上に、元通りにコンクリートの破片を被せて、日陰を作ってやった。この瓦礫の中では、一個の死体を中心として、ゴキブリや蝿や目に見えないいろんな微生物が、独自の生態系を、新しい秩序を構築している。そんな微かな秩序を護っているほんの少しの日陰を取り去り、灼熱の太陽の下にすべてをひからびさせるような権利は、あたしにはないのだ。

駅周辺の残骸を漁り、夕方になってあたしはようやく、缶詰をひとつ発見した。『おしまい』以降に発見した、最初の固形食料品だ。ミカンのシロップ漬けを「固形」と呼ぶのが妥当かどうか、疑問に思うところもあるけれども。

『業務用』と書かれた、一抱えほどもある大きな缶は、ところどころがひしゃげているけど、破れて穴が開いているような部分もなく、どうにか缶詰らしい形状にとどまっていた。両手で持ち上げてみるとずっしり重く、中身が無事であることをうかがわせる。

食べ物を発見できたことは嬉しい。だけど、見つけた当初からずっと懸案なのは、これをどうやって開けるか、だ。

業務用のミカンの缶詰が落ちていたあたりからして、やっぱり喫茶店の跡地ではないかと思い、あたしはその近辺に缶切りが落ちてないかと探したのだ。缶切りでなくても、この際包丁でも釘抜きでもフォークだって、見つかれば何でもいいように思えた。だけど、何も見つからなかった。

少しばかりひしゃげているとはいえ、缶詰は途方もなく堅固だった。指先で小突くと、かんかん、という硬い金属音がする。プロレスラーでもびっくり人間でも伝説の空手家でもないあたしには、この缶を素手で開ける芸当はとてもできない。

嫌になるくらい有り余っているのは、コンクリートの破片だけだ。握りこぶしくらいの大きさの石を手に取る。砕けた断面がごつごつととんがっている。あたしはミカンの缶詰を地面に置き、手に握った石ころでがん、と殴った。それから、もうちょっと力を込めて、がつん、と殴った。缶の表面には白っぽい小さな傷がついただけで、それどころか、コンクリートの方が若干すり減ったように見えた。すごいや缶詰。日本の技術に乾杯。

いやだから、感心してる場合じゃなくて。

要するに、あたしの腕力じゃ太刀打ちできないんだ。よく分かった。それなら、どうすればいいだろう？　見渡す限り、手に入りそうな道具といえば、建造物の残骸ばっかり。コンクリートか、そうでなきゃ、あたしの親指くらいの太さの鉄筋。まったくどれも、缶詰を開けるなんていう繊細な作業に向いたシロモノじゃない。土建国家万歳、って感じだ。

もっと大きな石でも落としてやれば、缶のどっかがねじ切れて開くだろうか？だけど、失敗したら缶がぺしゃんこに潰れて、到底食べられなくなってしまうかもしれない。試してみるべきか、それともっといい道具が手に入るまで我慢すべきか。喉がごくり、と鳴った。あたしは『おしまい』以来、コーラと水以外に何も口にしていないことを思い出した。我慢も限界だった。

板状のコンクリートの上に、缶を横向きに寝かせる。転がりださないように、缶の脇を小さな石で固定する。それから、上に落とすための巨大な石を――持ち上げようとしたけど、あたしの腕力では上がらない。ああ、何か長い棒とかあればな。てこの原理で持ち上げられるんだけど。って役に立つじゃん理科の授業。

もう少し、適度な大きさの石はなかっただろうか。スイカくらいの大きさの石に目をつけ、あたしは両手で抱えると、ふん、と鼻息を吹いて一気に持ち上げる。持ち上がった瞬間に、腰骨が悲鳴を上げたような気がした。大体あたしは体育会系に向いてないんだ。指先が切れそうに痛い。二の腕がぷるぷると震える。

缶詰の上であたしは、ほとんど力尽きて投げ出すようにして、石を落っことした。石は缶の端のあたりにぶつかり、ごん、と鈍い音を立てた。缶の縁が巻き上がるような変な形に歪んだ。それだけだ。どこも破れたりはしていない。

あたしはもう一度石を持ち上げる。お腹の低い位置に石を抱え、がに股でよたよたと数歩歩いてから、缶の上に落とす。再度端の方を狙ったつもりだったけど、狙いが外れ、缶詰の真ん中らへんに命中した。ぶしゅっ、という音がした。下敷きにしていたコンクリートの上に、じわりと水溜りが広がる。やばい、やばい。

あたしは慌てて缶詰を持ち上げた。缶詰の一部がぺたんと貼り合わされたように潰れ、その端に穴が開いて、そこからシロップが漏れ出ている。あたしは缶を高く持ち上げ、こぼれてくるシロップを口許に落とした。甘い。そうか、缶詰のシロップってこんなに甘かったんだ。いつもなら間違いなく捨ててしまっていたシロップ。それが今、こんなに貴重だ。何かの漫画だっけ、雪山で遭難した主人公が「昨日残したラーメンのおつゆ、全部飲めばよかった」と嘆いている場面を、急に思い出した。

シロップはすぐに滴り落ちてこなくなった。大方は既に流れ出てしまって、もうとっくに蒸発して空の上だ。ま、仕方ない。覆水盆に返らず、とはこのことだ。こぼれたミルクに涙をこぼしても仕方ない。まったく、その通り。蒸発した缶詰のシロップは、同じように蒸発したあたしの汗や唾液やなんかと空中で混ざり合い、そのうちに雨でも降らすかもしれない。そう考えることにした。そうとでも考えなければ、やってられない。

そんなことはどうでもいい。問題は、まだこの缶の中に残っていると思われる、ミカンの実の方だ。缶の破れた口は小さく、中にミカンが入っているのかどうか覗いて確認することすらできない。あたしは缶を強く振ってみた。くちゅっ、という、湿った柔らかい塊の揺れ動く感触があった。これは、期待できる。

とはいえ、この潰れかかった缶の上に同じように石を落としたとしたら、今度こそ缶がぺしゃんこになって、中のミカンも到底食べられなくなるだろう。そのくらいのことは、容易に想像がついた。何か別の、開ける方法を考えなきゃいけない。

あたしは試みに、力任せに缶をねじったり折り曲げたりする方向に、力を加えてみた。これだけ潰れかかっていれば、もう少し力を加えればどこかがねじ切れるんじゃないか、と思ったのだ。……残念ながら、期待通りとはいかなかった。壊れかかってもなお、缶詰はあたしの細腕より頑強だった。指に痛みを感じ始めたところで、あたしはその無益な挑戦から手を引いた。

半分ひしゃげたミカンの缶詰を手にぶら下げたまま、あたしは歩き出す。このままここにいても仕方ないように感じられたからだ。とにかく、一度穴が開いてしまった以上、中身が腐りだす前に食べなきゃ。そのためには、何か別の道具か、別のアイデアが必要だ。

小学校跡地の水場に戻ってきた。ミカンを食べ損ねたあたしは、結局今日も水ばっかり飲んで空腹をごまかしている。まったく、どうしたわけか、水だけは潤沢にあるのだ。

ううん、贅沢を言っちゃいけない。水があるだけでも大したもんだ。この水場を見つけることができなかったら、あたしだって今頃とっくに日干しになって、ゴキブリや蛆虫の餌になっていたに違いない。それにこの水だって、いまはこんこんとわき出ているけど、いつ枯れるか分からないんだから。

胃袋が、突然空腹であることを思い出したように、ぎゅううっと鳴った。あたしは恨めしそうにミカンの缶詰を見つめた。食料品はあるのだ、すぐそこに。だけどこのままでは、あたしは貴重な食料を目の前にしながら口に入れることもできず、ただ腐っていくのを見守ることになってしまう。

あたしはミカンの缶詰を顔の上に掲げ、穴の開いているところが自分の口の上に来るようにして、もう一度缶を振ってみた。もしかしたら、ミカンの小さなかけらの一つくらい、何かの拍子に飛び出してくるんじゃないかと思ったのだ。無駄な努力だった。

ああ、ミカン、ミカン。食べられないと実感するほど悔しくて、頭がミカン一色になる。確かにこの缶詰に開いた穴は、ミカンの一房より小さいんだけど、それでもあの微小なツブツブよりは大きな穴が開いているはずだ。あれってミカンの細胞なんだっけ。つぶつぶオレンジジュース、なんてのもあったな、最近あんまり見ないけど。あれだって、そんなに缶の口がでっかく開いてたわけじゃないんだから。……って、

あれ？

思いついた。あたしは、水筒代わりに使っているペットボトルで水を汲んで、缶の穴の開いたところから、少しずつ、静かに水を注いでいく。缶詰の中半分くらいまで水が入ったところで、あたしは穴のところを指でふさいで、勢いよく缶を振る。じゃぶじゃぶ、と鳴る。

それからあたしは、おもむろに缶の穴に口をつけて、中の水を飲んだ。ごく微かに、ミカンの甘みが移ったような気が、するような、しないような。問題はそこじゃない。しばらく水を飲んでいると、そのうち、さっき振った勢いで砕けたミカンの破片が、水と一緒に、口の中に滑り込んできた。

ほんの小指の先くらいの量だ。だけどあたしは、そのミカンの切れ端を、大事に、とても大事に噛みしめた。ちょっぴり涙が出そうになった。ああ、甘い。甘くて、すっぱい。そうだ、ミカンはこんな味だった、思い出した。シロップでふやけたミカンを奥歯で噛むと、くにゅん、と柔らかな感触があって、それからぷつり、とはじけて、口の中にミカンのジュースが広がる。そうだ、クリームあんみつ。マドカが大好きだった、デパートの甘味処のクリームあんみつだ。寒天と

つぶあんと、それからシロップ漬けのミカンにチェリーに白桃が……

……途方もなく暑い日だった。あたしは図書館で何か読んでいたところを、マドカからメールで呼び出されて、いつものデパート内の甘味処に来たのだった。同じデパート内ならあたしは、有名ファッションブランドがプロデュースしたカフェがあるから、そっちの方が好きなんだけど、マドカは頑なに甘味処への信頼を動かさない。いつもだったら「太るから」とかいう理由で、豆寒天だのところてんだのといった、素っ気ないものばかり食べていたあたしが、その日に限って、どうしてマドカに付き合ってクリームあんみつなんか食べてたんだろう？　そのへんは思い出せない。

とにかく、台風と台風の合間で、すかーんと晴れた夏休み。窓際の席に座ったのは大失敗だ。冷房が効いているはずのデパートの中で、ここだけ少し、日差しに空気が暖められている感じがする。

「きゃー、あんみつだわー♪食べよ食べよー」

夏休みに入ったせいで、マドカは週一かもっとか、とにかくあんみつ三昧の日々を過ごしているようだ。そんなに毎度毎度同じもの食べてるのに、いったいどうしてこんなにはしゃぐことができるのか、分からない。いい加減、飽きるってことはないんだろうか？

あたしがマドカに呼び出されて甘味処であんみつを食べる、なんてのは、どちらかというと珍しい。マドカもあたしがあんみつなんか食べたがらないことは分かってるから、いつもならまず、メグやエリコに声をかけていた。はずだ。だけど、あんまり頻繁に呼び出すもんだから、いい加減メグやエリコの方が飽きてきたんだろう、あんみつに。

今日だって別段相談事とかあったわけでもなく、ただ、マドカがあんみつ食べたいのに一人じゃ嫌だから、あたしを呼び出したってだけのことだ、と思う。そうだ、ずっと本読んでてちょっと脳が疲れてる気がしたから、たまには甘いもの食べよう、って思ったんだ。

考えてみれば、しばらくぶりのクリームあんみつ。あたしはアイスクリームをスプーンの先で突き崩して、口に入れる。ここのアイスは牛乳の素朴な味だ。マドカはアイスと餡と寒天とフルーツを、もうほとんどかき回すようにして、一緒くたにほおばる。その食べっぷりを見てると、スプーンが小さすぎるんじゃないかって思えるほどだ。

だけど、マドカの手は小さくて細くて青白く、むしろその手に握られたスプーンは、不釣合いに大きく見えるんだ。こんなに甘党で大食いのマドカが、どうしてこんなに細い体型でいられるのか、不思議だ。細いっていうか、小さいっていうか。

そのときもあたしたちは、大して重要でもない、とりとめのない話をしていた。忙しくスプーンを口に運ぶ傍らで、マドカはおしゃべりの方にも忙しく口を動かしていたんだけど、いったい何の話をしていたのか、その辺りはぼうっとモヤでもかかったみたいに、思い出せない。

マドカは大きな目をきょろきょろとよく動かしながら、いつも唐突に話を始めては、唐突に話題を切り替える。「ところでさー」と「そういえばさー」がマドカの口癖だ。そういえば、と言いつつ、それまでの話題と文脈が繋がったためしがない。だからあたしはマドカの話を、なんとなく聞き流すことが多かった。マドカも要は誰かに話を聞いて欲しいだけで、別段あたしの意見やアドバイスを求めているわけではないから、マドカが一方的にしゃべってあたしが聞く、という流れが完成する。そのことでお互い、別段気を悪くすることもない。

「そういえばさー」

マドカがいつものようにそう言って切り出す。あたしはスプーンの先からほんのちょっと視線を外して、ちょっとだけマドカの方を見る。目が合う。スプーンの上の寒天を口に運んでいいものかどうか、あたしは一瞬ためらい、結局口に放り込む。同時に、マドカが続ける。

「ルリさぁ、どうしてタクトと付き合わないの？」

うぐっ。

あたしは頬張った寒天を噛まずに飲んでしまった。喉につっかえて、一瞬咳き込みそうになる。寒天が案外平穏につるん、と食道を通過し、呼吸が落ち着いたところで、あたしは珍しくマドカに異議を申し立てる。

「……あのさぁ、どうしてそういう話になるわけ？」

「えーっ、だってさぁ、条件いいじゃん。背高いし、顔だってそんな悪くないし、けっこー優しそうだしさ。もったいないよー」

それだったらマドカにあげるよ、と言いそうになって、さすがにあたしは思い直した。それはトゲのある言い方だ。もう少し控えめな言い方を探して、結局あたしは、こう応じた。

「じゃあさ、もしマドカがあたしの立場だったら、タクトなら即ＯＫ？」

「んー、即ＯＫって言えば即ＯＫ、かな。とりあえず、一回付き合ってみてから考える」

なるほど。それはそれで一つの考え方だな、とあたしは思った。あまり真似し

たいとは思わないけど。そう言えばマドカは、先月別れた男で四人目だった、高校に入ってから付き合った男の数。早い例では半月もたなかったこともあったっけ。

「ルリだってさ、一回付き合ってみりゃいいじゃん。付き合ってみるまで分かんないことだってあるし、そんで嫌だったらすぐ別れちゃえばいいんだしさ」

「うーん、なんかそういうのって好きじゃないな、あたし」

「実は結構理想高い？」

「別に、そういうわけじゃないけど」

「あ、そっかぁ」急に当を得たように、マドカが笑う。「ルリって、まだバージンだったっけ」

「……関係ないでしょ」

「いやいや、関係あるって。重要でしょ」

話にのめりこんできたらしく、マドカが徐々に身を乗り出してくる。アイス溶けちゃうよ、って言おうとして、マドカのクリームあんみつがとっくに空になっていることに気づいた。寒天の上で半分傾いたアイスが溶けかかってるのは、あたしの方だ。仕方なくあたしはクリームあんみつの方に集中力の比重を置いて、マドカの話を話半分に聞き流すことにした。

「それがいちばん重要っしょ。最初の相手がヘタだったらさ、マジへこむよー。あたしなんて悲惨だったもん。痛い痛いって言ってんのにさ、もう全然無視で、自分のことしか考えてないのね。そんときは最初だから分かんなくて、こんなもんかって思ったけどさ、今考えたらあれってハズレだったなーって。大ハズレよ」

すっかりゆるくなったアイスと、シロップ漬けの黄桃をスプーンで一緒にすくって、口に運ぶ。溶けかかってはいてもアイスはひんやり冷たく、珍しくしゃべりすぎて熱を持ったあたしの喉を冷やしていく。

「その点タクトなら、ってあたしタクトとヤッたことないから知らないけど、たぶん、そこそこ上手いんじゃないかなー。案外女の子相手だと、ちゃんと相手の顔色見てるもんねー、あいつ。あたし思ったのはさ、やっぱ相手のことちゃんと見てない男はダメだね、ってこと。普段しゃべってるときに目が泳いでる男は、エッチの時もやっぱり相手見てないんだよねー。これは間違いない」

あんみつをほとんど食べ終わって、小さな寒天の切れ端を器に残った糖蜜と一緒にすくう。蜜の甘さを噛みしめながらあたしは、やっぱり豆寒天とかにすればよかったかな、と思う。確かに脳がエネルギーを欲していたかもしれないが、それにしてもこれはちょっと甘すぎた。体の内側から、砂糖漬けにされているような気がする。せめて白玉あんみつとか、フルーツみつ豆とか、アイスの乗っかってないやつにすべきだった。

「あーあ、ルリはいいなぁー。あたしにも誰か告ってこないかなー、いい男。って、待ってるあたりが既にダメなんだけどねー。なんかさー、刺激が足んないのよ、刺激が。突然いい男が現れるでもなし。雑誌のモデルにスカウトされることもなし。高校生の今だってこんなに変化に乏しい人生送ってるんじゃ、この先就職でもしたら、ほんとにお先真っ暗よ」

そんなに変化に乏しいんだったら、とりあえずこのクリームあんみつをところてんにでも変えてみればいいのに。そんなことを思いついたけど、黙っていた。変化に乏しい人生送ってる点では、あたしも大差ない。

「あー、そうそう。そういえばさー」

またマドカの「そういえばさー」が始まった。何がそういえばなのか分からないけど、とにかくマドカは話してる最中にコロコロ話題を変えるんだ。

「ルリも聞いた？　例の『おしまい』のハナシ」

ほら来た。

相変わらずマドカの話の振り方は唐突だ。さっきの話から何がどうして『おしまい』の話題につながるのか、あたしには分からない。だけど、マドカの頭の中では何かがつながってるんだろう、きっと。

「なに、マドカそんなこと気にしてんの」

「えー、だってなんか面白いじゃない。ある日突然何もかも全部リセット！　なんてさ、ほんとにそんなことあったら面白いと思わない？」

「面白いか？」

「んー、今こうやって想像してる分には」

「なるほど」

あたしは納得してしまった。確かに、こうして甘味処であんみつなんかつつきながら、世界の終わりについて漠然と空想を巡らせたところで、そんなものに現実感なんかあるはずもない。いっさいが絵空事の、無責任な空想であるだけに、いろいろと勝手な考えを浮かべることができる。

「でもさー、今こんなときに『おしまい』が来ちゃったら、あたしたち一巻の終わりだよねー。こんなデパートなんか、一瞬で消し飛ぶでしょ。どうやっても助からないよねー」

「っていうか、どこにいたって助からないって」

「そうかな？　ジャンボジェットが墜落したって、乗客何人か生き残ったりするくらいだから、案外人間って頑丈なんじゃないかなー」

「だとしても、マドカは生き残りたいって思う？　世界中ぐちゃぐちゃで、他みんな死んじゃって、自分だけ生き残るって、結構悲惨だと思わない？」
「んー、微妙。確かに悲惨かもしんないけど、そんなぐちゃぐちゃになった世界をいっぺん自分の目で見てみたい、って気はする。そんで、こりゃダメだって思ったら、自殺でもすればいいんだしさ」
「なるほど」

……思い返せばあのときは、ずいぶん気楽だったものだ。
長い長い回想から、あたしはようやく現実に立ち返る。ミカンの缶詰を振ってみると、まだちゃぷん、という感触がある。もう少し水を足して振ってみようか。
中途半端に食べ物を口にしたせいで、余計に空腹感が増した。そういえば、便秘にでもなったときみたいに、下腹がちょっとぽっこりしてきた気がする。何か嫌なガスでもたまってるのかもしれない。嫌だなぁ、とあたしは思う。それから、まあ別に誰が見るわけでもないし、と思い直してみる。この調子でいけば、じきにあたしは、地理か歴史の教科書に載ってる写真みたいな、飢餓状態ってやつの見本みたいな姿になるんだろう。
それにしても、たったひとかけのミカンから、色々なことを思い出した。何かの小説に出てきた話だっけ、紅茶に浸したマドレーヌを食べることで、昔を思い出す、ってシチュエーション。そんなのに、ちょっと似てる。
いや、そんなに高尚な代物じゃない。今のあたしは、どちらかといえば、限られた道具を使って缶の中のエサを必死で取り出そうとする、実験室のチンパンジーに近い。
不意に脱力感が全身を襲った。何をしてるんだ、あたしは。
『おしまい』を迎える前にあたしが有していたいくばくかの知識、例えば、ファッションのことや音楽のこと、読んでいた本のことや見ていたテレビのこと、そんなものは今やまったくの無価値で、食糧と水のことばかりがあたしを支配している。生命活動の維持と、それにかかる一次的な欲求が、あたしのすべてだ。あたしはもう人間じゃない。実験室のチンパンジーと同じだ。水場にいたドブネズミと同じだ。誰かの死体を食べて生き延びているゴキブリと、同じだ。
違う。ちがう。
そうじゃない。いろんなことを、思い出さなきゃいけない。あたしは人間だ。生まれてきてから十六年余り、見聞きしたこと、読み書きしたこと、話したこと、考えたこと。いろいろあるはずなんだ。あたしは、あたし。有澤瑠璃子。ありさわるりこ。ルリとかルリっぺとかアリさんとか色んな呼ばれ方してたけど、あたしは、ありさわるりこだ。ありさわるりこ、ありさわるりこ。連呼してないと忘れそう。ありさわるりこ、ありさわるりこ、ありさわるりこ……繰り返していくうちに、何だかそれがほんとうに自分の名前だったのかどうか、それも怪しく感じられてくる。何かの暗号みたい。ありさわるりこ。
あたしは立ち上がる。片腕にミカンの缶詰、もう片方の手に水の入ったペットボトルと携帯電話を抱えて。あたしは、あたし。思い出さなきゃいけないんだ。そのためには、話さなきゃいけない。電波の届く方へ、あたしは歩き出す。今あたしを動物の領域から引き離し、人間の領域へ引き戻すことのできる唯一の道具が、この携帯電話であることを、あたしは今ようやく理解した。

辺りはもうすっかり暗くなっていた。だけど、今日は携帯のアンテナが立つところで寝ようと思う。
しばらく歩いて、アンテナが一本から二本になったところで、おもむろにメールの着信音が鳴った。そういえば、この携帯のメール着信音を聞くのは初めてかもしれない。いつも、寝てる間とかに受信してたから。ちなみに着信音、ラジオ体操だった。しかも第二。
この携帯にメールが届くなんて、発送元は例の「神岡」さん以外にありえない。すぐにメールを開く。そういえば、この前のメール、あたしは何を書いて送ったんだっけ。既に忘れてる。

「subj：Re: 宮の森
西 28 丁目あたり。東西線」

……西二八丁目？
そうだ、宮の森ってどこか、ってメール出したんだ。そっちはどこ、って質問に、宮の森って答えが帰って来たから。だけど、西二八丁目？　ますます聞いたことのない地名だ。東西線って書いてある。東西線沿線に、西二八丁目なんて場所、あっただろうか？
だけど、もしほんとに東西線の近くだったら、案外ここから遠くないかもしれない。お互いの場所が分かれば、歩いて会いに行くことだって、不可能じゃないかもしれない。そうだ、直接会って話をすることができれば、それが一番いい。

「subj：西二八丁目って
東西線の東京側？　千葉側？」

これで少しは場所の特定になるだろうか？　あたしはすぐにメールを送信する。送信してから、携帯をじっと両手で握り締めて、待つ。ほんの五分くらいで、すぐに返事が返ってきた。

「subj：Re：西二八丁目って
東京の東西線じゃなくて、札幌の東西線」

肩からがっくりと力が抜けた。そうか、東西線って名前の電車は、札幌にもあるのか。考えてみれば、東西線とか南北線とか、そんなありがちな名前の路線、全国どこにだってあるのかもしれない。

それにしても、陸続きならまだしも、札幌じゃどうやったって会いに行けそうにない。いくら『おしまい』の劇的なインパクトの後だって、さすがに北海道と本州が繋がってる、なんてことはないだろう。少し期待を持った後だけに、落胆は激しかった。

いや、落ち込んでる場合じゃない。

メールを送信してから五分くらいで返事がきたっていうことは、向こうも電波が安定している状態だってことだ。今なら、ほとんどリアルタイムでやり取りができるはず。気を取り直そう。メールを書こう。聞きたいこと、話したいこと、いっぱいあるはずだ。

そうだ、何度でも大声で叫ぼう。有澤瑠璃子十六歳、都立高校二年生、趣味は読書、特技バイオリン。あたしの名前は有澤瑠璃子。まず、そこからだ。英語の教科書だって最初は自分の名前を言うところから始まるんだ。マイ・ネーム・イズ・ルリコ・アリサワだ。すべてのコミュニケーションは、まずそこから始まる。

「subj：自己紹介
あたし有澤瑠璃子十六歳高校生」

句読点を打つのも煩わしくなって、そんなメールを一、二分で入力し、すぐに送る。返事が来るのが待ち遠しい。液晶画面をじっと見つめて待つ。ほんの何十秒、何分かの時間を、途方もなく長く感じる。自分の心臓のとくん、とくんという音が聞こえる。

「subj：Re：自己紹介
御手洗かおる二十二歳大学生」

返事が来た。御手洗かおるさん。「神岡」さんじゃなかった。きっとあたしと同じように、誰かの携帯が無事なのを発見して使ってるんだろう。御手洗かおるさん。まさか「おてあらいさん」ではあるまい。みたらいさんだ。みたらい、かおる。

そう思いながらも、心のどこかに不安がある。果たしてこれは、本当にミタライって読むんだろうか？　ミタラシさんかもしれない。あるいは、あたしには皆目見当のつかないような、途方もない特殊な読み方が、あるのかもしれない。それに、御手洗かおるさんは、男なのか、女なのか？　この名前ではそれもまったく分からない。どっちでもあり得る名前だ。

そもそもこの人は、本当に、ほんとのほんとに、「御手洗かおる」さんなのだろうか？　実のところそれさえ確証が持てない。もしかしたら嘘をついているかもしれない。五十過ぎのおじさんかもしれない。相手が十六歳の女子高生だと分かって、親しみやすいように嘘の名前と年齢を書いたかもしれない。それが本当か嘘かだって、あたしに見抜く術はないのだ。

だけど、ということは、逆もまた真なり、だ。御手洗さんにとっても、あたしが有澤瑠璃子であることを確信する理由は、何もない。女子高生を騙る不審人物として、疑ってかかっているかもしれない。

ああ、突然自己紹介なんてするんじゃなかったかな。だけど、そうでなかったら、いったいこのメールに何を書けばいいんだろう。あたしは有澤瑠璃子だ、それはあたし自身にとって、この上なく明白な事実だ。だけどたったそれだけのことを、この携帯の電波を介して繋がっている御手洗かおるさんに、どうしても伝えることができない。どうしよう。どうしよう。

御手洗かおるさんに、どうしても会いたくなった。札幌と東京では、それが無理な望みであることは分かりきってる。だけど、こんな風に断片的に言葉のやり取りをしたら、かえって我慢できなくなった。もっと話したい。声を聞きたい。呼吸を、肌の熱を感じたい。別に男でも女でもいい、二十二歳の大学生じゃなくたっていい。五十過ぎのおじさんだって、十歳の小学生だって、いっこうに構わない。会いたい。

……声を、聞きたい？

そうだ、こんな単純なことに、どうして今まで気づかなかったんだろう。今あ

たしたちは、メールをほとんどリアルタイムでやり取りできるくらい、電波の安定した環境にいる。通じるはずだ。携帯電話に登録された番号を繰っていく。川口さん。穴田さん。深川さん。……期待したとおり「神岡」さんの番号がある。すぐに発信ボタンをおす。ぷっ、ぷっ、ぷっ。通信音が鳴って、それから呼び出し音が鳴り出す。心臓が早鐘を打ち始める。落ち着け、落ち着けあたし。深呼吸しながら、だけど携帯を耳に押し当てた手が、小刻みに震えている。

とぅるるる、とぅるるる。

ぷつり、という感触があって、呼び出し音が途絶える。耳を澄ますと、じいっ、というノイズが聞こえた、ような気がした。もう、心臓が口から飛び出しそうだ。暫時の沈黙。おそるおそる、あたしは切り出す。

「……もしもし？」

声を出してみてあたしはびっくりした。こんなに上ずった、震えた声が出るなんて思ってなかった。何がこんなに、あたしを不安にさせるんだろう。もしもし、の返事が来るより前に、ごめんなさいって言って電話を切っちゃおうか、そんなことさえ考えた。

「……はい、もしもし？」

あたしが馬鹿げた思い付きを実行に移すより前に、携帯電話は澄んだ女の人の声で、そう応じた。通じた。通じたんだ。ひとの声。あたし以外の誰か、人間の声。それが、こんなにあったかいなんて。

「えっと……ミタライさん、ですか」

躊躇しながら、あたしはそう尋ねる。間違ってたらどうしよう。怒って電話を切られちゃうかもしれない。そうしたらきっとあたしは、もう二度と電話をかけることができない。どうか、どうか間違っていませんように。キリスト教徒でもないくせに、あたしはこんな時だけ、神様に祈る。

「有澤さん？　有澤瑠璃子さん、なのね？」

華やいだ声が返ってきた。その声からは、驚きと喜びの成分を感じることができた。ああ、よかった。通じた。そうだ、あたしは有澤瑠璃子だ。そして、この人は御手洗かおるさんだ。御手洗さんはあたしがありさわるりこであることを、あたしは御手洗さんがみたらいかおるさんであることを、確信した。通じたんだ。

安堵すると同時に、途端に、ぼろぼろと涙が出てきた。何してるんだあたし、泣いてる場合じゃないのに。通じた。通じたんだ。あたしはこの『おしまい』の後の世界で、初めて他の誰かと、言葉を交わしている。それこそあたしがずっと望んでいたことなのだ。話さなければいけないことが、山のようにある。あたしがこの十六年で得たいくばくかのこと。あたしを動物から隔て、人間たらしめる何か。読みかけの本のこと。アルベール・カミュ。夕暮れの教室であたしに告白してきた男子のこと。タクト。それから……ああ、そうじゃない。あたしは何を話せばいいんだろう。怒涛のように様々な思いがあふれてきて、あたしは押し流されそうになる。そして、涙も際限なくあふれてきて、何か言おうとしても、ちっとも声にならない。

「ああ、よかったあー！　あたし、もうこの世界で生き残ってるの、自分だけかもしれない、って思ってた。有澤さん、よかった。生きてるのね？　元気なのね？」

「うん」

「でも、こんな風に電話が通じて話ができるなんて、奇跡みたい。電話してくれてありがとう。こっちの携帯には、メールアドレスしか入ってなかったの」

「うん」

うんうん、じゃないだろ、あたし。内心そう自分にツッコミながら、どうしてもそれ以外の言葉が口から出てこない。話したいこと、いっぱいあったはずなのに。何だかもう、頭真っ白だ。

御手洗かおるさんはみたらいかおるさんだった。女の人だ。五十過ぎのおじさんでも十歳の小学生でもなかった。優しそうな声だ。何だか、お姉さん、って感じだ。今この瞬間、同じ地球上で、生きている。札幌にいる。札幌にも東西線って名前の電車があって、その沿線の、西二八丁目、っていう辺りにいる。たったそれだけ。それだけしか分からないのに、どうしてこんなに、涙が出るんだろう。

「こっちはね、昼間は暑いんだけど、夜になると、ちょっと寒いの。東京はどう？」

「東京は……夜も、ちょっと暑い」

「そうかー……食べ物とか、どうしてる？　寝る場所とかは？」

「食べ物は……水は、湧いてるとこ見つけた。あとは、ミカンの缶詰があった。それだけ」

違う、こんな話をしたいんじゃない。生命活動を維持する必然、それだけじゃ動物と何も変わらない。あたしはこんな話をするために電話をかけたわけじゃないんだ。そう思ったけど、何ひとつ声にならない。あたしはただ、御手洗さんの問いかけにひとつひとつ答えを返す、もうそれだけで、精一杯だ。

「ねえ、有澤さん」

御手洗さんのそんな呼びかけに、どきりとする。そうだ、有澤さんだ。あたしは有澤さんだったんだ。当たり前のことだ、だけど、誰かがあたしの名前を呼んでくれた。その瞬間にあたしは初めて有澤さんたりえたんだ。

「有澤さん、大丈夫だよね？　あたしたち、頑張れるよね？　頑張って生きていこうね？」
「うん」
「有澤さんのおかげであたし、希望が持てた。たぶん他にも、生きてる人がいるよ。東京と札幌じゃ遠すぎるけど……あたしたちは会えないかもしれないけど、どこかで誰か生きてる人と会えるかもしれない。だから、頑張ろうね？」
「うん」
頷きながらあたしは、不意にマドカの台詞を思い出していた。「こりゃダメだって思ったら、自殺でもすればいいんだしさ」――どうして突然、御手洗さんの話とまるで正反対の、こんなフレーズが脳裏に浮かんだのか、分からなかった。
ほんの少し、沈黙が続いた。
やはり何かを話さなければならないような気がした。あたしは、音声が喉を通過して口蓋から飛び出し、空気を震わすあの感触に、飢えていたはずなのだ。だから、頷いてばかりじゃなくて、何かを話さなければいけない。あたしは唇をちょっと舐めて、それから、こう言う。
「……会いたい」
どうしてこんな言葉が口をついて出たのか、分からなかった。東京と札幌では、実際問題会うことは不可能だと分かっていた。なのに、こんな台詞が出てくるなんて、自分でもびっくりした。
しばらく返事がなかった。あたしの台詞が、御手洗さんを困らせてしまったんだろうか？
そうではない、と気づいたのは、もう何秒か経ってからだ。びりびりっ、という嫌な音がした。途切れ途切れに、変な音がする。通信状態に何か問題が発生していたことを、あたしはようやく理解した。
「ごめ……ちょっと、電……ま、何て言……」
御手洗さんの言葉が、ぶつ切りになって届く。何を言っているのか分からない。きっと、電波が悪いって言ってるんだ、と思う。
「ねえ、会いたいよ」
あたしは繰り返す。その言葉が御手洗さんに届いているのかどうか、分からない。
「会いたい」
三度目は明らかに届いていないことが分かった。あたしが、会いたい、の「た」の形に口を開いたあたりで、電話機からはツーッ、ツーッと、通信が途切れたことを表す音が鳴り始めたからだ。

あたしは大仰にため息をついた。別に誰が見ているわけでもない、ため息をしてもひとり、の心境だ。さて、あたしの方の電波状態が悪くなったのか、御手洗さんの方か。一度電話をかけなおしてみようか。リダイヤルの操作をしようと携帯電話の液晶画面に目をやって、――そして、あたしは心臓が凍りつくような痛みを覚えた。
携帯電話のバッテリーのマークが、目盛りひとつ、減っている。
そうだ、考えてみれば当たり前じゃないか！　こんな夜の暗い時間に、携帯電話使ってたら、画面のバックライトで電力消費しまくるのは、当然だ。携帯のバッテリーに限りがあることも当然だし、この状況で充電器なんかあるはずないってのも、考えればすぐに分かることだ。どうして、もっと大事に使わなかったんだろう。あたしのバカ。
画面のアンテナマークは消えていた。どうやら電波に問題があったのは、あたしの方らしい。この状況では、リダイヤルもできやしない。諦めて、寝るより他にない。
これ以上の電力消費を抑えるため、一旦携帯の電源を切って、あたしは地面に横になって、手足を丸めた。さっきより、さらに余分に涙が出た。もったいない、こんなことで体内の水分とか塩分とか排出しちゃって、どうするんだ。その晩あたしは、携帯電話を両手で抱えるようにして、眠ることにした。

これだけ世界がめちゃくちゃになっていても、それでも夜の後には朝が、規則正しく訪れる。絶望的な朝だ。携帯の電源を入れてみると、液晶画面には死刑宣告にも等しい「圏外」の文字が表示されたままだ。暑さのあまり眠ってもいられなかったけど、だからといって手足を動かす気力もわかず、あたしはただ、お尻をぺたんと地面について、座り込んだままでいる。
もう、涙も出ない。瞼が接着剤で貼り合わされてるみたいにべたべたして、喉は渇いたというよりほとんど痛いような感じだ。手元には水の入ったペットボトルがあったけど、その蓋を開けて口に運ぶ気にすらならなかった。
このまま死ねたらいい。その時になって初めて、あたしは切実にそう思う。
『おしまい』から今までずっと、あたしは自分のこのちっぽけな肉体の、生命活動を維持することの必然性に駆られていた。水を飲むこと、何か食べること、寝ること、排泄すること。それすら満足でない状況で、他の事を考える余裕なんてなかった。だから、悲しくも寂しくもない。そう思ってた。
だけど、どうだろう。今のあたしを覆っているのは、生命活動の必然性よりも

もっと大きな、何か途方もない、虚無感だ。すぐに水を一口飲んで立ち上がり、動けるうちに何か食べ物でも探しに行った方がいい。そう、頭では分かっている。なのに、体の内側で何か、支柱みたいなものがぽきりと折れてしまったみたいで、立ち上がることができない。

「ぐちゃぐちゃになった世界をいっぺん自分の目で見てみたい、って気はする。そんで、こりゃダメだって思ったら、自殺でもすればいいんだしさ」

マドカの言葉が脳内リフレインする。もし今当時のあたしたちに言葉を届けることができるなら、そんな甘いもんじゃないよ、って言ってやりたい。自殺する？　首を吊るにも、頑丈なロープが必要だ。手首を切るにも刃物が要る。そんな道具をこの世界で調達し、自殺なんていう労力の必要な行動を実践するには、相当のエネルギーが必要だ。この世界で、自ら積極的に何かをする、なんてことが可能になるくらいに自分を奮い立たせるのは、簡単じゃないのだ。たとえそれが自殺のためであっても。

「有澤さん、大丈夫だよね？　あたしたち、頑張れるよね？　頑張って生きていこうね？」

今度は昨夜の御手洗さんの言葉を反芻する。頑張って生きていこう。頑張って。なんか、スポ根ドラマのフレーズみたいだ。頑張って。なんて無責任な。頑張る理由がないときに、どうして人が頑張ることができるのか？　頑張って生きていって、それでそれから、どうするんだ？　これ以上生きてたって、こんなひどい状態が続くだけ。何にもならないじゃないか。

だけど、あれだけ念を押すように「頑張れるよね？」って聞いてきたあたり、きっと御手洗さんも、だいぶくじけそうになってるんだ、って思う。当たり前だ。どうして生きているのか、何のために生きているのか。この状況で、そんな疑問を抱かない方がおかしい。

あたしは空を見上げる。天空には相変わらず雲ひとつなく、太陽は何にも考えていないかのようにギラギラしていた。それは太陽のせいだ、とあたしは呟く。今あたしの手元に拳銃があったなら、あたしは笑いながら自分のこめかみに銃口を当て、引き金を引くのだろう。とても簡単なことだ。

そうだ、何もかも、あの忌々しい太陽のせいだ。すべてをお気楽に高所から見下ろし、無責任に照りつけ続けている、あの憎らしい太陽。この矮小な肉体に律則されるあたしたち被造物の無益な営為を、知らん顔で見下ろしているんだ。あざ笑ってるんだ。あたしが大声で叫ぼうと、ミカンの缶詰と格闘しようと、携帯電話抱えて泣いてようと、そんなことは、大した問題じゃないんだ、お天道様にとっては。

どうして生きているのか、何のために生きているのか。この状況ではそんな疑問が湧いてくるのも当たり前だ。だけど、そんな疑問は太陽の前にはまったくの無力だ。太陽は等しくあたしたちをじりじりと照らし、分け隔てなくあたしたちを日干しにし、腐敗へと向かわせる。

ああ、もう、うんざりだ。

全身が気だるく虚ろで、このままここに座り込んで死ぬのを待とうか、と思う一方で、暴れ回って目に付くものをすべて叩き壊したい、というような相反する欲求も去来する。何のことはない。あたしは、確実に狂ってきている。しかも、狂い始めたあたしをどこかから冷静に見つめる、もう一人のあたしがいる。

「ありさわるりこ」

声に出して、あたしはそう呟いてみた。それはもう、自分の名前であるようには感じられなかった。何だか、頭の中に霧がかかったみたい。いっさいが不確かで、あたしを律していたものが全部どこかにこぼれ落ちて、何が何だか分からなくなってしまったような、そんな感じ。仕方ないんだ、太陽にとってはあたしの名前なんか、どうだっていいんだから。

両の手のひらを地面につけ、ゆっくりと力を入れる。重い腰を少しずつ持ち上げる。ようやく立ち上がって、肩の幅に足を開いて、あたしは、もう一度太陽をにらみつける。あまりの眩しさに目を細めるけど、心の中で、ひそかに宣戦布告。あたしはあの太陽に、最後の戦いを挑まなければならない。たとえそれが、風車に戦いを挑む気のふれた哀れな騎士のような、無益で馬鹿げた行動であっても。

タクトか、あるいはタクトに似た誰かの死体があった、その場所をあたしはちゃんと覚えていた。大きな石をいくつか持ち上げているうちに、履き古して汚れたナイキのスニーカーを掘り当てる。もう一つ石をどかすと、そのスニーカーからすっかり細い脛が伸びている。やあ、久しぶり、とあたしは呟いた。死体は何も答えなかった。

冷静に思い返せば、あたしがこの死体を見つけたのは、つい昨日のことだったのだ。だけど、昨日に比べて死体は何だかやせ細り、老人のようになってしまった印象を受けた。

顔のあたりの石をどけてよく見る。ほっぺたに青痣みたいな模様が見えて、ああ、これを死斑っていうのか、とあたしは納得する。全体に鈍い色あいの死体にあって、耳に刺さったままの金属のピアスが、異様なまでの光を放っている。考えてみれば確かに、タクトはこんなピアスをしていた、ような気がした。だけど

そんなのはあたしの思い込みかもしれない。
「ねえ」わざとらしく、死体に語りかける動作。「あたしと、ヤリたかった？」
死体は仰向けで、少し横を向いている。あたしは死体の側頭部を軽く蹴飛ばして、顔を真上の方向に向けた。それから、両足をそれぞれ死体の耳の横に置き、死体の顔をまたいで立った。
「ほら、見えてんでしょ。別に、全然大したもんじゃないけどさ」
あたしは左足をショーツから抜いた。タクトの死体の顔面の上で、性器をむき出しにして、仁王立ち。ふっと顎を上げて、太陽を見る。
「けっこう巨根、って言ってたっけ？　ほんとかよ」
それから、タクトのベルトに手をかける。だぼだぼパンツのボタンを外し、ファスナーを下ろす。ベルトの辺りを掴んで一気に引き下ろそうとするけど、だらりと伸びきった脚にまとわりついて、なかなか脱がすことができない。
ようやくズボンを膝の辺りまで引きずり下ろすと、トロピカルな柄のトランクスが現れる。黄色地にヤシの木とパイナップルの図案。こんなの穿いてたのかよ。ほんの十数秒ほど鑑賞させてもらってから、あたしはおもむろにトランクスを掴んでひっぺがした。
そして――実際のところ、成人した男性のペニスを見るのはこれで二人目なのだ、一人目はお風呂上がりにぷらぷら歩いてるお父さん――果たしてこれはこんな形状でよかったのだろうか、とあたしは首をひねった。陰毛に埋もれ、太股の間でぐったりとうなだれているタクトのペニスは、何か節足動物の幼虫みたいな、奇異な形をしていた。丸っこい先端部があって、その付け根にひだのようにたるんだ皮膚があって、そして全体的にどす黒い。
「なに、コレ」侮蔑のこもった苦笑。「こんなんで巨根だって。笑っちゃうよねー。全然、大したことないじゃん」
なりなりて成り余れるところ。人間の身体って存外けったいな構造をしている。まったく、お粗末な代物だ。笑っちゃう。だけどあたしの股間に存在するものだってまったく不恰好で、笑っちゃうより他にない代物で、そしてこんなもののために血道を上げてきた奴もいるのだ、タクトみたいに。
あたしは再びタクトの頭をまたいで立った。頭側から足側を見るように立つと、ぐったりとしなだれて恥骨に半分隠れるようにして、ペニスが見える。比較的長身のタクトの体全体に比して、それはあまりにささやかで、まさに余りものとして後からくっつけられた異物のように見えた。
あんなものを、あたしの股間に入れたくて仕方がなかったというのだ。それはとても滑稽で、馬鹿げた行為のように思えた。どうしてそんなものに、タクトが必死になっていたのか分からなかった。
「ほら、ちゃんと見てるんだよ」
あたしは右手をスカートの中に差し入れる。性器に触れる。汗やら尿やらで、すっかり嫌な汚れがまとわりつき、べとべとしているような気がした。中指の先でそっと陰核に触れる。微かな痛みで、全身にびくん、と電気が走ったみたいに跳ねる。『おしまい』の後久しく体験したことのない、異様な感覚だった。
指先で小さな円を描くように、陰核を包皮の上から撫でる。尾てい骨から背骨に向かって、ぞくぞくぞくっと寒気が駆け上がってくる。太陽がぎらり、とあたしの脳天を照らす。構うもんか。よく見ているがいい。唇の端をべろり、と舐める。指先を唾で濡らす。塩と泥と、他にも何か色々混ざった変な味がする。唾液に塗れた指でもう一度陰核をまさぐる。もう片方の手が自然と、胸を握り締めるようにしている。おへそのあたりから粘っこい汗が一滴、滑り落ちてきて、太股の内側を伝っていく。タクトのペニスは萎んだまま沈黙を保っている。どこかの空から、雲が一切れ流れてきた。あたしの指は膣の入り口をそっと押し開け、内側に入ろうかどうしようか、ほんの少し逡巡しているところだ。
太陽、あの太陽め。見せ付けてやる、この人間のくだらない営為を。だけどあたしたちはこんなことをもう百万年も続けてきて、それが今、終わろうとしているんだ。第一関節がすっぽり入った辺りで、耐え難い痛みに、あたしは慌てて指をひっこめる。タクトの指ならもう少し上手に割って入ってくれるのだろうか？だけどあたしはあたし。ありさわるりこ。マスターベーションを覚えたのは十二歳のとき。なんか文句あるか。クリトリスがぷっくり膨れ上がってきたのが自分でも分かった。唐突にミカンの缶詰を思い出す。もう腐ってしまったかもしれない。ああ、お母さんの毎朝一杯の牛乳。お父さんは何度注意してもお風呂上がりに裸で家の中を歩き回って、そうだタクトとヤッちゃったとかって自慢げにしゃべってた女子がいたな、クラスでみんなが『おしまい』の話をしてて、あたしは話の輪に加わらずに本を読んで、ああそうだ、『異邦人』だ。アルジェリアの強烈な陽光。ナイフに反射されてぎらりと光る、あの太陽。ああ、頭の中がごちゃごちゃだ。死ぬ寸前に記憶がみんな走馬灯、ってこんな感じ？
膝ががくん、と震えた。あたしは危うくその場に倒れそうになった。ちぎれた雲の一片が頭上をすうっと通り過ぎ、あたしの顔に影を落とす。絶頂を向かえ、息を切らしながら、あたしは空を見上げ、どうだ、と呟いた。ここに至って太陽はまだ沈黙を守り続けていた。

突然、雨が降り出した。『おしまい』以降、初めての雨だ。最初はぽつ、ぽつと降り出した雨も、あっという間にバケツかタライでもひっくり返したような豪雨になる。あたしは慌ててコンクリートの物陰に隠れた。

空はタールでも流したように真っ黒で、降り注ぐ雨もまた、墨汁みたいに黒い。きっと大気中の塵とかいろんな汚れを、集めて洗い流しているのだ。そうだ、それがいい、と思う。

正直、雨が降ることがあるなんて思ってなかった。『おしまい』の後はずっと、太陽の天下が続くものなのだと、根拠もなくそう信じていた。だけどそれは、あたしという人間の勝手な思い込みだったんだ。あたしがどう信じようと、太陽は昇り雨は降り、そうして人間のない世界でも、新しい秩序が構築されていくのだ。

死ぬなら今かな、と思う。

もうこの世界において、あたしが生きることの意味など、何もない。いや、そうじゃない。最初からあたしが生きることの意味なんてありはしない。より正確には、あたしが生きているところにこそ意味が生じていたのであって、今あたしが人間として生きることが困難になっている以上、意味なんてもはやこの世界中のどこを探したってないのだ。ただ、新しい秩序にそった資源の循環が、淡々と進められている。それだけなんだ。

今日は何月何日だろう、と思う。携帯電話に目をやる。電源を切るのを忘れていた。すっかり電池を消耗して、バッテリーのインジケータは残り一目盛りになっていた。そして、アンテナが一本。

アンテナが一本。

こんなときになって、通信復活してるなんて。皮肉だ。あたしはリダイヤルのボタンを押し、神岡さん＝御手洗さんに、電話をかけてみた。ぷっぷっ、という送信音に続いて、機械応答のメッセージが続いた。お客様のおかけになった電話番号は、電波の届かないところにいるか、電源がオフになっています。

電池は今にも切れそうだ。もう一回電話をかけても、つながらない可能性の方が大きいだろう。メールなら、あとで受信して読んでくれるかもしれない。それこそ、沈没船から瓶に手紙詰めて流す、っていうアレだ。あたしは電池が切れる前に、大至急でメールを打ち込んだ。

「subj：（なし）
あ痛い」

送信のボタンを押したその瞬間――あたしは、変換ミスに気づいた。

何だよ、あ痛いって？「会いたい」の間違い。そんなことは、分かっている。だけどどうしてあたしは、最後の最後のチャンス、一番伝えたいことを伝えようとして、どうしてこんなミスをしでかすんだ？　あ痛いっていうか、むしろこの誤変換こそが痛い。もう一度メールの入力画面を立ち上げようとして――ぴーっ、とエラー音が鳴り、画面には「バッテリーがなくなりました」の文字が表示され、少しして、画面が真っ暗になった。

途端に、妙な脱力感があたしを襲った。肩からがっくりと力が抜け、それから、不意に笑いがこみ上げてきた。くつくつくつ、と静かに沸騰するような笑い。横隔膜が変になったみたいだ。何がおかしいのか分からない。ただ、笑いが止まらない。押し殺していた笑いが次第に大きな笑いになり、あたしはよじれそうなお なかを抱え、大きな声を立てて、のたうち回りながら、笑い出した。何かがツボにはまったみたいで、あたしは笑いが止まらず、際限なく笑い続けた。

もう、何もかもがおかしくて仕方ない。あたしは携帯電話を投げ捨てた。携帯電話はコンクリートの角と過激な出会いを果たし、がしゃん、と音を立てて吹っ飛んだ。構うもんか。あたしは笑っていた。顔をくしゃくしゃにして、口を大きく開けて笑いながら、雨の降りしきる中へ飛び出していく。泥水みたいな雨に全身を強く打たれながら、あたしはミュージカルの主人公みたいに、ステップを踏んで歩き出す。笑いが、とにかく笑いが止まらない。

このまま笑いながら踊って死ねたら最高だ。あたしは瓦礫の上でぴょん、と飛び跳ね、着地に失敗して滑って転び、顔面を打った。鼻血が出てすごく痛かったけど、そんなこともむしろ滑稽で、笑いはいっそう激しく、止まらなかった。空を覆う雲はどす黒く、煤に汚れた雨は、いつまでも降り続けた。

〈了〉